

Ⅱ 「北海道木育（もくいく）フォーラム」の開催結果

1. フォーラムのしおり

もくいく 北海道「木育」フォーラム

～木とふれあい、木に学び、木と生きる、これからの^{もくいく}木育～

- 日時：2005年3月19日（土）13：30～16：00
- 場所：KKRホテル札幌 5階「丹頂」
- 主催：北海道



NPO 法人北海道子育て支援ワーカーズ「おもちゃフォーラム2004」
『木の砂場』で遊ぶ子どもたち

フォーラム開催の目的

「^{もくいく}木育」とは、子どもをはじめとするすべての人が、『木とふれあい、木に学び、木と生きる』取組です。それは、子どもの頃から木を身近に使うことを通じて、人と、木や森との関わりを考えられる豊かな心を育むことです。

「^{もくいく}木育」は、昨年から道民の方々と北海道がともに考えてきた新しい言葉であり、考え方です。フォーラムは、この「^{もくいく}木育」を広くお知らせするとともに、私たちと木や森林、環境との関わりを見つめ直すきっかけとさせていただくために開催するものです。

本日のプログラム

13：30 主催者挨拶

13：35 **基調講演**

「自然が育む豊かな感性～自分のセンス・オブ・ワンダーを見つけよう～」

上遠 恵子 氏（レイチェル・カーソン日本協会理事長）

14：25 **木育推進プロジェクトチームからの報告**

辻井 達一 氏（木育推進プロジェクトリーダー・（財）北海道環境財団理事長）

14：40 休憩

14：50 **パネルディスカッション**

「木とふれあい、木に学び、木と生きる、これからの^{もくいく}木育」

〔パネリスト〕

煙山 泰子 氏（KEM工房主宰）

宮本 英樹 氏（北海道自然体験学校NEOS（NPO法人ねおす）専務理事）

濱田 暁生 氏（（株）C I S計画研究所代表取締役）

〔コーディネーター〕

辻井 達一 氏（木育推進プロジェクトリーダー・（財）北海道環境財団理事長）

16：00 閉会

講師のご紹介

上遠 恵子（かみとお・けいこ）氏 【エッセイスト、レイチェル・カーソン日本協会理事長】

1929年生まれ。昆虫学者の父・田園育ちの母のもと、自然大好き人間に成長。多摩川の河原が今も変わらず大切なフィールドです。

1962年『沈黙の春』原本と出会い、70年F. グレアム『サイレント スプリングのゆくえ』共訳、74年P. ブルックス『生命の棲み家』（後に『レイチェル・カーソン』と改題、新潮社）を訳出以来、カーソン研究をライフワークとされています。また、99年にはグループ現代の長編記録映画『センス・オブ・ワンダー』の制作に参加、朗読者として出演もされています。

著書：『レイチェル・カーソンの世界へ』（かもがわ出版）

共著：『生命の樹の下で』（子安美知子氏との共著）（海拓社）

訳書：R. カーソン『海辺』（平河出版・平凡社ライブラリー）、『センス・オブ・ワンダー』（新潮社）、『潮風の下で』（宝島文庫）、C. スコールズ『平和へ』（岩崎書店）など。

コーディネーター・パネリストのご紹介

辻井 達一（つじい・たついち）氏

【(財)北海道環境財団理事長】

【木育推進プロジェクトリーダー】

1931年生まれ。東京で生まれ育った後、北海道へ。北海道大学農学部附属植物園長、同大農学部教授、北星学園大学教授を経て、97年より(財)北海道環境財団理事長。日本国際湿地保全連合会長、北海道遺産構想推進協議会会長など、公職多数。

曰く、「自然を守るなどと大げさに考えなくてもいいんですよ。みんなが普通にできることが一番肝心。」

著書：『湿原—成長する大地』（中央公論社）

『北海道の湿原と植物』（北海道大学図書刊行会）

ほか

煙山 泰子（けむりやま・やすこ）氏

【KEM工房主宰】

【木育推進プロジェクトメンバー】

1955年生まれ。札幌で生まれ、育つ。木工デザイナーとして『子供たちとかつて子供だった人への贈りもの』をテーマに、北海道の木と子供にこだわって活動。遊具や生活日用品は網走郡津別町で製造され、20年以上にわたり『KEM』製品として親しまれています。最近、石狩市民図書館、帯広新図書館（建設中）、幌南学園幼稚園、遊戯施設等、子供スペースのデザインに力を入れるとともに、昨年の台風18号で倒れた北大・ポプラ並木の再生と、倒れたポプラの活用のプロジェクトに参画。

宮本 英樹（みやもと・ひでき）氏

【北海道自然体験学校 NEOS (NPO 法人ねおす) 専務理事】

【木育プロジェクトメンバー】

1969年生まれ。置戸町で自然と第一次産業に囲まれて育った後、学生時代を関東で過ごし、北海道の新聞社に入社。しかし、地域と自然と教育の観点から持続可能な社会を目指してNEOSでの活動を開始。今までに黒松内町、登別市、弟子屈町などの地域コーディネートを手がけてきました。現在、生涯学習や体験学習、エコツアーのコーディネート、ネイチャーセンターの企画・運営、ガイドの養成など幅広く活躍中。モットーは「過去を再評価し、未来を再構築する。」

共著：『日本型環境教育の提案』（小学館）

『北海道ネイチャーツアーガイド』（山と溪谷社）

濱田 暁生（はまだ・あきお）氏

【(株)CIS計画研究所代表取締役】

1943年生まれ。九州の田舎で育ち、幼少期は野山での遊びに没頭。このところの仕事が森林と関わることが多く、思いがけないところで、「山猿体験」で身につけた自然観が生きています。68年、北海道大学大学院工学研究科修士課程修了（建築計画専攻）。東海大学札幌校舎工学部建築学科講師を経て、70年(株)アトリエブク設立。89年(株)シー・アイ・エス計画研究所設立、現在、同社代表取締役。北海道美しい景観のくにつくりアドバイザー、地域づくりアドバイザー、森林づくり審議会委員をはじめ、景観・まちづくりに関するアドバイザー・委員など公職多数。

共著：「成熟都市のシステムデザイン」((社)北方圏センター)

2. フォーラムの開催状況

①参加人数

- ・ 事前申し込み数 170名（託児申し込みのあった子ども除く）
- ・ 参加者数 166名（うち、事前申し込み者137名、当日申込者29名）
- ・ 託児数 14名

②アンケート

- ・ 配布数 166票
- ・ 回収数 57票（回収率34.3%）
- ・ 回答者の内訳
 - イ) 性別 男性23名
女性32名
不明 2名

ロ) 年齢

	男性	女性	計
10歳代	1名	0名	1名
20歳代	1名	12名	13名
30歳代	5名	9名	14名
40歳代	6名	2名	8名
50歳代	3名	4名	7名
60歳代	6名	5名	11名
70歳代以上	1名	0名	1名
空白	2名	0名	2名
合計	25名	32名	57名

③会場の様子



3. フォーラムの記録

■開会

北海道水産林務部木材振興課 田中 あずみ

年度末のお忙しい中を北海道「木育」フォーラムにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

さて、この「木育」という言葉ですが、本日初めて耳にする方も多いかと思えます。本日は、この「木育」というのはどのような意味なのか皆様にご紹介申し上げるとともに、前のほうにもございますけれども、「木とふれあい、木に学び、木と生きる、これからの木育」をテーマに、豊かな森林に恵まれた北海道から発信する「木育」という取り組みがどのようなものなのか皆様と一緒に考えてまいりたいと存じます。

それでは、開会にあたりまして、主催者であります北海道出納局の河村耕作より皆様にごあいさつを申し上げます。

■主催者挨拶

北海道出納長 河村 耕作

河村でございます。本日、道内各地からたくさんの皆様にご参加をいただきまして、本当にありがとうございます。まずは御礼を申し上げたいと存じます。

本日、知事は所用でございますので、誠に僭越とは思っておりますが、私から北海道「木育」フォーラムの開催にあたって主催者を代表いたしましてごあいさつをさせていただきますと存じます。

皆様方には、平素から道の行政、いろいろな方面がございますが、それぞれのお立場でご協力をいただいておりますことに御礼を申し上げたいと思えます。

また、ご案内のとおり北海道は経済、雇用、そして北海道庁自体の財政の問題、また教育、いろいろな面におきして問題を抱えております。こんなときでございますから、これまで以上に皆様と北海道の職員である私どもが知恵を出し合いまして、一体となつていろいろな課題に少しでも前進できる答えを見つけていきたいと考えております。そして苦しい時代ではございますが、こんな中から、逆にこれまで以上に夢のある北海道づくりに取り組んでいける、逆の意味で、契機ではないかとも感じております。

そのめたにも、政策づくりの段階から道民の皆様とともに考えて行動していくということが大切でございますので、北海道では皆様と道庁が連携協力をさせていただいて政策づくりを行っていく。このような事業を昨年度から実施をしております。

検討するテーマにつきまして道民の皆様からメンバーを募らせていただいて、道庁職員も一緒にさせていただいて、プロジェクト会議などを開催して取り組むべき政策について議論を重ねながら知事への提言をとりまとめているというふうなものでございます。

今年度は、森林環境に対する意識が高まっている中で、木を切り、加工し、大切に使い、再び木を植え育てるという森づくりのサイクルを円滑に進めることの大切さを、子どもさんたちをはじめ、私たち道民がしっかりと認識をするということが必要であるとの考えか

ら、木育の推進を検討テーマに選定したところでございます。「木育」という言葉は造語でございますが、プロジェクト会議では「木育」を「子どものころから木を身近に使うことをつうじて、人と木や森との関わりを、主体的に考えられる豊かな心を育むこと」と定義をさせていただいております。

そのためには「木とふれあい、木に学び、そして木と生きる」様々な取り組みを進めていくことが重要との考えに至ったものと伺っております。

道といたしましても、プロジェクト会議からの提言をふまえて、来年度以降、木育を推進するための施策の具体化を図ってまいりたいと考えております。

本日のフォーラムは「センス・オブ・ワンダー」の訳者であり、レイチェル・カーソン日本協会理事長でもございます上遠恵子様をお招きし、「自然が育む豊かな感性」をテーマにご講演いただくことといたしております。

また、プロジェクト会議の辻井リーダーから、「木育の推進」についての考え方をご報告いただいて、そのあと森林環境学習の実践や木製おもちゃの製作、また、まちづくりなどの分野で幅広くご活躍をされているパネラーの方々からご提言をいただくこととしております。

プロジェクト会議での論議にもふれながら、会場にお集まりの皆様とともに、木育の取り組みについて考えるひとときとなることを期待しております。

本日のフォーラムの開催を契機といたしまして、木育の取り組みが私たちと木や森との関わりを見直すきっかけとなりまして、道民のみなさんと一緒に様々な取り組みが活発に展開されていきますことを強く祈念をいたしまして開会にあたってのごあいさつとさせていただきます。

本日は、よろしく願いをいたします。

(司会者)

それでは、本日の予定を簡単にご説明申し上げます。

お手元に緑色のプログラムをお配り申し上げているかと存じます。この内側に「本日のプログラム」というところがございます。そちらに1日のご予定を書かせていただいております。

はじめに、レイチェル・カーソン日本協会理事長でいらっしゃいます上遠恵子様より50分ほどご講演をいただきます。

引き続き16年度、今年度になりますけれども、北海道と道民の方々が協働しまして、この「木育」について検討を行ってまいりました「木育プロジェクト会議」というものがございます。そちらのプロジェクト会議からのご報告を、プロジェクトのリーダーでいらっしゃって北海道環境財団理事長でもあります辻井達一様より行っていただきます。

その後休憩を挟みまして、辻井リーダーにコーディネーターをお願い申し上げましてパネルディスカッションを進めてまいります。

最後に、全体をとおしまして質疑も予定しております。どうぞ皆様ご発言のほうをよろしく願いいたします。

なお、終了時間は16時ちょうどを予定しております。

それでは、大変お待たせいたしました。早速、レイチェル・カーソン日本協会理事長の

上遠恵子様より、「自然が育む豊かな感性について」お話しただきたいと思います。なお、上遠様の略歴等につきましてはお手元の資料をご覧ください。

それでは上遠様、どうぞよろしくお願ひいたします。

■基調講演

レイチェル・カーソン日本協会理事長 上遠 恵子 氏

みなさん、こんにちは、上遠恵子です。

カゼをひきまして、本当はもう少し声がいいはずなのですが、ちょっとガサガサしていて申し訳ありません。

今ご紹介いただきましたように、レイチェル・カーソン日本協会というのがございまして、その理事長をさせていただいております。

ところで、「レイチェル・カーソンって何、どういう人？」ということもあるわけなのですが、今日おいでになった方はご存知かなと思いますけれども、レイチェル・カーソンという女性、アメリカ人なのですが、名前を知っている人は手を挙げてくださいますか。

さすが半分以上の方が知っていらっしゃいますね。

21世紀は環境の世紀といわれるくらい環境問題が複雑に、また大きな問題になっています。その中でいろいろな話をしていくと、ずっと歴史をさかのぼっていくと、そこには必ずといっていいくらいレイチェル・カーソンの「沈黙の春」という1冊の本に出会うのです。

それは、みなさんご承知のように、レイチェル・カーソンは、アメリカの海洋生物学者であり作家なのです。その人が1962年に「沈黙の春」という本を書きました。「サイレントスプリング」というのですが、それは人間が自分の都合のいいように虫を殺す、害虫を殺す、農作物を食い荒らす害虫を殺す、街路樹の害虫を殺す。そういうことでDDTとかBHC、今先進国では多く禁止されていますけれども、そういうものをまき散らしていたがために環境が化学物質によって汚染されて、そして野生生物が随分死んでしまった。野生生物に影響があるということは、同じ自然の中の一つ族である人間にも影響のあることだ。そういうことで、化学物質による環境汚染を鋭く警鐘を鳴らしたのが「沈黙の春」なのです。その「沈黙の春」は、非常に難しいというか、鋭く厳しい問題提起の書であります。

ですけれども、海洋生物学者でしたから、海の3部作といって「潮風のもとで」「われらをめぐる海」「海辺」という海のプロフィールを本当に詩情豊かに、しかも科学的に書いています。そして最後に、1964年に、彼女は56歳で亡くなりましたが、その死後を友人たちがまとめて出してくれたのが「センス・オブ・ワンダー」です。

原本は非常に写真の多いきれいな本なのですが、日本の訳としては小さなかたちの「センス・オブ・ワンダー」という本になって出ております。

これは「沈黙の春」が非常に鋭く切り込んでいることに対して、「センス・オブ・ワンダー」は自然の中で自然体験、しかも小さい子どもたちが自然体験をすることによって育まれていく子どもが本来持っているセンス・オブ・ワンダーを本当に穏やかに書き記しています。

センス・オブ・ワンダーというのは不思議だなと思う心、美しいもの、神秘的なものに目を見張る感性。そういうものを小さいときに育み、そしてそれをずっともっていけば、その人の人生がどんなに苦しいときにも克服できるし、環境問題を考えるときに一番基本になっている自然の命を考えることができるだろうという、非常に穏やかな説得力のある本を書いた人がレイチェル・カーソンなのです。

私は生きていらっしゃるときにお目にかかったことはないのですけれども、かれこれ40年ぐらいレイチェル・カーソンの仕事、そしてその人となりというものを追い求めるというか、はまり込んでしまって40年ぐらい経ってしまいました。

「センス・オブ・ワンダー」という本は、アメリカの東海岸を北のほうに行くと、カナダに近い所にメイン州という森林の多い州があります。彼女は、そこのある森の片隅にサマーコテージをもっております。そこに自分の姪の息子である小さなロジャーという男の子がよく訪ねてきます。その子と一緒に昼となく夜となく海辺だの森の中だのを探検して歩いて、そこで見た子どもの感性の豊かさ、素晴らしいものに目を見張る生き生きとした感性。この本は、そういうものの体験をもとにして書いてあります。

そして、この本は、日本でも自然教育とか体験教育、環境教育をやっている方たちの間で、これこそが自分たちが日頃思っていることを言い表してくれたと大変喜ばれた本になりました。

そうしたら、あるドキュメンタリーフィルムをつくっているプロダクションがありまして、その会社が発足したときに最初につくったのは、「沈黙の春」に触発されて「農薬化・農薬の災い」というフィルムでした。そして25年経ったから、今度も何かそういう環境問題に関するフィルムをつくりたいということで、この「センス・オブ・ワンダー」をつくることになりました。

私は監修ぐらいだったらできるでしょうというふうなことで引き受けして、これを書かれた舞台であるメイン州の四季を訪ねて歩くというフィルムをくつりました。

これをお読みになった方はご存知でしょうけれども、筋があるわけではありません。ドラマ仕立てでもありません。ですから「朗読記録映画」というかたちをとりました。

その朗読は、私はきっと朗読が上手な女優さんが起用されるのだろうなとすごく楽しみにしていたのです。しかし、監督が言うのには、「その朗読を上遠さんがやってください」と言うわけです。そんなバカなど。私は、「小学校の国語の時間に読んだ以外、人の前でものなど読んだことがないから遠慮させてください」と言ったのです。ですけれども、彼いわく「あなたは日頃から、レイチェル・カーソンの志をみんなに語り継ぐことがライフワークだなどと言っているではないか。まさにこれこそが語り継ぐことだから」と。どんどん外堀を埋められていきました。

何でもそうですけれども、「うん」と言うほうが楽で、「否」というのは、断るといのはすごいエネルギーがいることです。そんなことで、私はエネルギーを使いたくなかったので「うん」と言ってまいりました。

みなさんにメイン州はこんな所だということをお見せしようと思って、デモンストレーションフィルム、こんな映画ですよというのを15分ぐらいにまとめたのがあります。私の下手な話を聞いている時間が少しでも短くなるように、メイン州という森がどんなにきれいな所か見ていただいて次に進みたいと思います。

では、ビデオのほうをお願いします。

………「デモンストレーションフィルム 放映中」………

本編は106分か107分かかりまして、途中でスヤスヤと眠ってしまうくらい静かで退屈だという人もいるし、よかったという人もいろいろあります。

こんな所でレイチェルは「センス・オブ・ワンダー」を書きました。

「沈黙の春」に対してものすごい誹謗があったわけです。化学企業など、いろいろなところからありました。その非難に対してレイチェルは、毅然として、決してくじけることがなかった。それには2つの理由があると思うのです。

一つは、彼女は科学者でしたから千数百編の化学論文を読んで、自分の書いているものは全部裏がとれている、しっかりした証拠のもとに書いてあるという自信。科学的に正しいという確信。

もう一つが「センス・オブ・ワンダー」という豊かな感性に裏づけられて書いている。

そういう信念があったから、彼女に加えられたかなり激しい誹謗に対しても毅然としていられたのだと思います。

「センス・オブ・ワンダー」ですけれども、みなさんが小さいときに感じて育った環境によって違うけれども、豊かな感性というものはみんながもっているものなのです。

だけれども、大人になってくるとだんだんそういうものを忘れてしまって、心の奥底にしまいこんでしまって、人工的なもの、プラスチックなものという表現がありますけれども、そういうものが頭にいっぱいになってきて、自然というものから離れていってしまう。そういうことがあるのではないのでしょうか。

いみじくも私はこのごろ思うのですけれども、「センス・オブ・ワンダー」の本を訳したのは1991年でした。やっと本が本屋に並んで、どのくらい売れているかなと思って紀伊國屋に行きました。若い女性の店員さんに「センス・オブ・ワンダーという本はありますか」と聞きましたら、店員さんに「戦争ってなんだという本ですか」と言われて。「センス・オブ・ワンダー」と「戦争ってなんだ」は似ていますよね。それで「『センス・オブ・ワンダー』という本で『戦争ってなんだ』という本ではないのです」と言いました。それはまさに笑い話みたいなのですけれども。

今私は「戦争ってなんだ」ということを、私は戦争体験者です。1929年生まれですから、第2次世界大戦のときはティーンエイジでした。ですから戦争をよく知っています。本当に戦争というのは一番の環境破壊だなということをしみじみ思います。この間ケニアの環境副大臣であるワーカーリン・マータイさんという女性の方がみえていましたけれども、彼女は植樹運動、グリーンベルト運動をいたしましてノーベル平和賞をもらっています。彼女は、「民主的國家でなければ環境は守れない。平和でなければ環境は守れない。そして戦争は最大の環境破壊である」ということを言っています。本当に私もそう思います。ですから、私が「戦争ってなんだ」という本に間違えられたということを、いつもいつも笑い話のようにして思っているけれども、このごろは本当に平和でなければ環境は守れないということを思っています。

戦争を知っている人間はどんどん少なくなっているのです、私は必ずこういう機会をいた

だいたときには「戦争はやめようね。平和でなければ駄目だよ」ということを言うことに決めました。それで申し上げているわけです。

戦争というのは物理的な環境の破壊ばかりではなくて心も荒廃させてしまいます。それはいろいろな事実でおわかりだと思えます。そういうことは、私たちの次の世代に経験させてはいけないことであると思っております。センス・オブ・ワンダーをもつということは、決して「きれいね、素敵ね、美しいわね」というやわなものではない。もっと厳しいものである。自然の中には怖いこともあるし痛いこともある、かゆいこともある、いろいろ厳しいことがあるという現実。死というものを見つめなければならないときもある。そういうものに対してもしっかりと受け止められる。それでつぶれてしまわないような感性も、私はセンス・オブ・ワンダーだと思うのです。

ですから、センス・オブ・ワンダーが、ただただ「きれい、きれい」というだけではないということをはっきりと申し上げたいと思っております。それを今の子どもたちにどうやって受け継いでいけばいいのでしょうか。

私たちはみんなセンス・オブ・ワンダーという感性をもっているのだけれども、いつの間にか干からびてしまっている。ですから、それを何かのときに水をたくさんやって豊かに甦らせる。そして、そういうものをもったお母さんたちが子どもを育てるときに、とても素敵な子どもが育っていくのではないかと思います。

「木育」といいますけれども、木を育てるということはとても時間のかかることです。お花の歌ではありませんけれども、「種を蒔きました。芽が出てふくらんで、花が咲いて…」というふうな調子になるには何年も何年も、大きな木になるのにはかかります。それと同じように私たちは、子どもたちの中に豊かな感性を育むということに焦ってはいけません。今教育の現場でも結果を早く出さなければならないというようなことがあって、とてもせかすのです。

森の中で成人ばかりを集めてワークショップをやったことがありました。森の中でいろいろな木の葉の臭いをかぐ。透明ではない入れ物でもって目をつぶって臭いだけをかぐ。そういうことをやりました。

そうすると、「絶対に蓋を開けたら駄目だよ」と言っているそばから開けて見てしまうのが学校の先生なのです。彼らは反省を込めて言っていましたけれども、教師は結果を出さなければならないと義務づけられているものだから、結果を早く出さなくなってしまうのだ。私みたいな教師ではない無責任の人間は、結果はあとからついてくるものだからそんなに焦らなくてもいいと思うのですけれども、確かに世の中は忙しいものですから、待つということを親も教師もしないのです。待つというのがどんなに大切なことかということ、私はこの映画のロケのときにも感じました。

「さあ、今日はあそこの森に行って撮ろう」といっても、そのとき森の光の具合が悪ければ永遠と待たなければなりません。それから、満ち潮のシーンを撮ろうと思っていたら引いていた。そうしたら、どんなに人間ががんばってもその時間を早くしたり遅くしたりすることはできません。そのときに私は、本当に人間がこんなにも自然のリズムの中で無力というか、それはあたり前のことなのですけれども、そのリズムに人間が合わせなければならないということを感じました。

そして、待っているときにはいろいろな収穫がありました。満ち潮と引き潮の音の違い。

岩礁海岸でしたから、引いていくときにはプチプチ音をしながら海草の中を海が引いていきます。そしてしばらくたって満ちてくるときは、圧倒的なエネルギーが沖からくるような感じがして、音も明るく「チュルチュル、チュルチュル」と「来たよ、帰ってきたよ」というような感じ。その感じがはっきりわかったときに、私はとてもうれしかった。自分にそうした違いがわかった、こんなばあさんになったけれどもそういうものを感じ取れたということだけでずくく得した気になりました。

プロ集団の中で仕事をしておりましたから、すごく自己嫌悪になりました。こんな下手くそではどうしようもない。向こうでカメラマンが舌打ちしているのまで聞こえてくるみたいに、すごく落ち込んだこともありました。そういうときには、しょうがないから、一人で森の中に入って行ってポツンと座っています。1時間ぐらいボーッとしているうちに、実際に声が聞こえるわけではないのだけれども「ありのままでもいいんだよ」と、そのようにいわれているような気がしました。「それ以上できなかつたらそれでいいじゃないか。ありのままでもいいんだ。これが唯一無二のやり方であるなんてどこにもないんだよ」と、そういうふうにいわたいるような気がして癒されて帰ってきたことがあります。

そのときは、海はとても静かで波の音もほとんど聞こえない。サササッとリスが枝を走ります。リスというのは走りながら自分の邪魔になる枝をプチン、プチンと折っていくのです。その音まで聞こえてくる。そうしたら私は、自分の朗読が下手くそであろうと誰が舌打ちしようといいじゃないかと居直った気持ちになりました。私が大自然のリズムの中にすっかり身をゆだねたときに、こんなにも元気になれるのだと思いました。そのような環境は、何もメイン州の森に行かなければできないというのではなくて、どこでもできることなのだと思います。静かな気持ちになったり、いろいろな人のいろいろな声を聞いている。そういうときに沸き上がってくるのは、自分の中の生きる力ではないかなと思いました。

文部科学省は、盛んに「子どもの居場所を考える」ということを言っています。ですけれども、子どもはもともと自分の気持ちの良い居場所を知っているけれども、大人が「これは駄目、あれは駄目」と、いろいろシャットアウトして行く手をふさいでいるのではないかなと思ったりもします。

子どもたちに森の中にいろいろなプログラムをつくってやることもあります。それはプログラムどおりにいかななくてもいいのです。子どもがその中でクリエイションの創造力とイマジネーションの想像力をどんどん育てていくことができる。そういう場所をポンと子どもに与えてやる。それを大人は規制しないで見ている。そういうことが「木育」の中に含まれていると思います。

木というのは素晴らしいものです。私たちの祖先は6千万年ぐらい前に森の中に生まれて、そして500万年前に二足歩行をして草原に出てきました。そして手が使えるようになって、人類として進化してきたわけです。それまでの5500万年は森の中にいた。その緑の記憶というものが遺伝子の中にすり込まれているのです。ですから緑を見るとホッとします。それは生物としての人類の基本的なものではないかなと思います。それを無理に人工的なものでもってつぶしていかないほうがいいと思います。鶴見に環境エネルギー館というのがあります。そこで毎年テーマを与えていろいろな絵葉書を募集するのです。私が審査員をしたときには、「100年後の地球」というテーマでした。

その絵は入選しなかったし、本当に稚拙な絵だったのですけれども、忘れられない絵なのです。

地球があるのです。土が茶色で描かれていて、1本だけ木の芽が出ていて、それに水をやっている熊とも何ともいえない動物がいて、そのタイトルが、なんと「1からやりなおし」と書いてあるのです。その絵は本当に稚拙な絵なのですけれども、忘れられないです。100年後の地球は、1からやり直しをしなければならないということ子どもが考えているということに驚きつつ、やり直すときには木なのです。木の芽なのです。それは、やはり私たちの中に緑の記憶があるのです。それをもっと、特に北海道は森林がたくさんあるところですから、私たちは地球という惑星に生きる生物の一種族としてそれを育み、その中でもって木からもらうものをたくさん受け取って、それを子どもにも伝えていく。伝えていくのではなく子どもと一緒に感じていく。そういうことが必要ではないかと思っています。

親が教え込むのではなくて親と一緒に子どもと楽しむ。それが一番ではないかと思うのです。子どもはお父さんやお母さんが大好きですから、道や何かでおもしろい物を見つけると持ってきて、「はい」といって見せます。そういうときに忙しかったりして無視すると、本当に子どもはしょぼんとしてしまう。そのときに「うれしい、きれいだね。おもしろいね。どこにあったの」と、いろいろ反応すれば子どもは生き生きします。

その生き生きする気持ちを私たち大人は子どもにいつも感じさせたい。私生活は猛烈に忙しいし子育ても大変だけれども、でも子どもと一緒に楽しむ、楽しんであげる。教えなくていいのです。日本人は教育熱心なものですからやたらに教えたがるのです。植物の名前なんて教えなくてもいいです。いつかは植物図鑑を調べればわかることです。教えなくてもいいから一緒に感じてあげる。それは、都会の街の中にいるよりも森に行ったほうが一緒に楽しめる。お母さんと話題を共有するということがどんなに大切か。今は子どもと話題を共有するということが案外ないのです。

大自然に行けなかったとしても、あそこの家のあの木をいつも見ておく。定点観察です。My Treeを決めるわけです。僕とお母さんの木を決めておいて、3月に見た、4月に見た、5月に見た。そうするとどんどんその木も変わってくる。空き地の隅のあの角、あそこだけを僕たちの庭と決めておく。それだけでもいろいろな変化が出てきます。そうすると、それで話題が豊富になっていく。そうすればお母さんと話ができる。お父さんと話ができる。食卓の中であそこにいた毛虫の話とか、いろいろな話をする。それが大事なのです。「センス・オブ・ワンダーを養いましょう」という課題でもって勉強するのではなくて、日々の繰り返しでセンス・オブ・ワンダーが豊かになっていくことだと思っています。

私たちは、特に大人は発信モードでいるのです。自分の意見を言う、人に言う。トランシーバーだと、発信しているときは相手の声は聞こえないわけです。ですから、あるとき私たちは受信モードに変えてみる。そうすると案外自然の声も聞こえてくるかもしれない、子どもの声も聞こえてくる、他人の言葉も聞こえてくる。そういうことが求められているのではないかと思います。「スローライフ」ということにもいわれています。いろいろなことがいわれていますけれども、今人類というのは一つの文明の危機に直面しているのではないかと思います。

これでもか、これでもかと、右肩上がりの経済成長というのは幻想にすぎないと思った

ほうがいいと思います。有限な地球というものの中にいる生き方というものが、今もう一度文明の再構築ということを考えなければならない時期にきていると思います。

そのときに木の文化というのは、とても大事なことだと思っています。私は小さな孫と一緒に暮らしているのですけれども、おもちゃは全部木のおもちゃです。プラスチックの物は一切渡していません。プラスチックの物は強引に使わないようにしています。木や植物という物を与えて、一つの実験みたいなものなのですけれども、この子にそういうものを与えないで、どれだけ豊かな、仲間はずれにされないだけの強さをもっていかどうか眺めているところです。

レイチェル・カーソンが「沈黙の春」の最終章である第17章に「The Other Road」-別の道という章があります。その冒頭にこんなことが書いてあります。

「私たちが今までたどってきた道は、素晴らしいハイウェイでものすごいスピードに酔うこともできた。だけれども行き着く先は、災いであり破滅だ。もう一つの道がある。その道はあまり人も行かないが、その道をたどるときにこそこの地球と命を守ることができる。どちらの道を選ぶか決めるのはあなたたちだ」、そのようなことが書いてあります。40年前にそういうことがいえたという先見性に私は本当に驚くわけです。今考えてみると、その「別の道」というのは、今いわれている便利さや豊かさというものは、もうここでいいではないか。ここら辺で立ち止まらないか。そしてもう一度自分たちの生活、自分たちの文明というものを問い直してみようではないか。そういうスローライフをいっているのだと思うのです。

私は、自分の人生がどれだけあるかわかりませんが、できるだけそうしたことを考えて自分のライフスタイルを変えていくことが本当に人間らしく、それから命というものを大切に育てていく道になるのではないかというふうに思っております。ですから私は、別の道を歩む勇気というものをこれからもっていきたいと思っております。

話しがあちこちに飛んでしまってすみません。また質問や何かがあったらおっしゃってください。時間になりましたのでこれで終わらせていただきます。

ありがとうございました。

(司会者)

上遠様、大変貴重なお話をありがとうございました。みずみずしい感性を育むこと、子どもと一緒に遊んで感じることを、私たちをとりまく環境、地球、そういったことについて立ち止まって考えて、そういったものの大切さについて改めて気づかせていただいたように思っております。

上遠様に、もう一度大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

なお、上遠様につきましては、後程のパネルディスカッションの際にフロアでご参加いただけることになっておりますので、上遠様への質疑につきましてはその際に合わせて承りたいと存じます。

続きまして、今年度に北海道と道民の方々が連携・協力しまして、「木育」について検討を行ってまいりました「木育推進プロジェクトチーム」から、その検討内容につきましてご報告を申し上げます。

ご報告は、プロジェクトのリーダーであり（財）北海道環境財団理事長でもいらっしや

います辻井達一様よりお願いいたします。

なお、辻井リーダーの略歴等につきましてはお手元のレジュメをご覧くださいませ。
それでは辻井様、よろしくお願いいたします。

■木育推進プロジェクトチームからの報告

財団法人北海道環境財団知事長 辻井 達一 氏

みなさん、今日は土曜日の午後にお集まりいただいて大変ありがとうございます。

今、上遠さんから大変興味ある、心に染み入るようなお話をいただきました。

私は、今紹介してもらいましたように、「木育プロジェクトチーム」のリーダーということで、ここ半年ほどの間チームスタッフと一緒に「木育」の問題を考えてきました。そして、ひととおり議論が尽くしたというふうに考えていますので、それをまとめたわけです。

お手元の袋の中に随分たくさんの資料が入っています。非常に地味な資料ですが、こういう一綴りのものがございます。それをご覧ください。

本来はというべきでしょうか、下のほうに「3月19日フォーラム版」としてあります。これは報告書そのものではなくて、報告書の要約版です。本来と申し上げたのは、こういふときにはきれいな色刷りのパンフレットか何かにしてお配りするのが普通ではないかと思うのですけれども、極めて地味なものにしました。別に、大上段に振りかぶって「紙を大事にしましょう」というふうな意味でやったのではなくて、今はとにかくこういうところにまとめて地味なものでいいのではないかという程度のことです。決して気負ってこういうふうにしたというものではございません。ちょっと見にくいかもしれませんが、その辺はご勘弁いただくとして、中身については読んでいただければわかりますから、いちいち説明することは二重になりますのでしないつもりです。

ただ、この「木育プロジェクト」はどのようにできあがってきたのかというようなことだけを申し上げようと思います。

最後のページになるのですけれども、そこに木育プロジェクトチームの名前が書いてあります。これを見ていただきますと、どんなにいろいろな分野の方々にご参加いただいたかがわかると思います。いろいろな分野の方がいらっしゃるわけです。大学で、それこそ木を使った造形を専攻していらっしゃる方もいらっしゃったわけです。それから、あとでご登壇いただきますけれども、煙山さんみたいに、木のおもちゃといいましょうか、木を使ったものをおつくりになっている方もいらっしゃる。

それから、書籍の編集プロデューサーをなさっている方もいらっしゃいます。実際に木でつくった物売る立場であるコクヨ北海道販売の山本さんもいらっしゃる。そのように、実に様々な分野の方々がいっぱいいらっしゃるわけです。

これは、みなさん公募で応募してくださった方々です。それに加わっていただいて、このプロジェクトチームをつくったということです。道庁が音頭をとったには違いありませんけれども、今回の木育のレポートをまとめたのは、早くいうとそれを専門にしているわけでもないし仕事にしているわけでもないメンバー、道庁のスタッフということで加わっている人もいますけれども、必ずしも木そのもの、あるいは森林そのものに携わっている人ばかりではない。だから非常におもしろい議論があったわけです。

逆にいいますと、議論が沸騰しすぎてなかなかまとまらなかったという苦勞もありました。

しかし、これだけの分野の人が集まったチームというのは今まで多くはなかったのではないかと思います。

それから、今議論を随分尽くしたといたしましたけれども、メンバー表の下に「検討の経過」として「プロジェクト会議」をいつやったのかが書いてあります。実は、議論はこういう場だけではなくて、つまり集まって議論を戦わせたということだけではなくて、むしろ今は電子会議室というのがあります。Eメールを使ってやり取りをする。それが非常に盛んでした。実は、それは今でも続いています。

と申しますのは、先程申しましたように、これは要約版なものですから、本報告というものは議論がどのように行われて、どういう議論があったかというようなことを含めたものにしてまとめて出さなければいけないわけです。そこがお役所流というところなのですけれども。それには、今申し上げた電子会議室でやり取りをしたということが細かく載せられることになるだろうと思います。

そこで、中身の特徴だけ申し上げておこうかと思います。3ページにこんな図があります。これは、いろいろなかたちで書かれていることがあります。これは、そこにも説明がありますけれども「メビウスの輪」という有名な図です。テープの一端をねじってつなぐと裏表がつながってしまうという「メビウスの輪」です。議論の途中でだったのですけれども、木育というのは森林という立って生きて育っている木と、それが木材になって、木材としていろいろな物に使われるものと、テーブルや床、先程例にあげましたおもちゃみたいな物もそうなのですけれども、そのような材として使われる、あるいは、それを木炭のように焼いて使うというケースもあります。つまり、それは死んだ木ともいえますし、生きています木ではないかもしれないけれども木そのものには変わりない。そういう二面性を持っているものであろうという話がありました。

それはまったく別々に、つまりテープの裏表のように、こちらは生きています木の面で、その裏側は死んだ木、つまり材としての木だというふうに分けて考えることができるのだろうという話が出ました。そうではないのではないかとということで、「メビウスの輪」が出てきたわけです。

木を伝えていくと、枯れて倒れる。人間が切らなくてもそういうことはあるわけですから、そういうものになるわけです。切株から芽が出てくるということもあるわけです。生きています木と材としての木というのは、必ずしも裏表の関係ではない。まったく別々に存在するものではない。一繋がりのものだと考えてもいいのではないかとというようなことで、メビウスの輪という考え方があったなという話が出てきました。それはなかなかおもしろい視点ではないかとということで、ここに載せたわけです。

我々が「木育」を考える上で、全部を木材としてだけ考えるというものでもないし、森林だけの、生きています木だけのことを考えて進めるべきではないというふうにもいえるのではないかと。逆にいいますと、そういうことを言いたいためにメビウスの輪を持ち出したといってもいいかもしれません。

それから、そもそもの話しですけれども、木育とは何かということでもかなりの時間が費やされました。簡単にいいますと、今は「食育」という言葉が使われておりまして、かな

りポピュラーになりつつあります。そこで、乱暴な言い方ですけれども、「食育」があるなら「木育」があってもいいではないか。これは私が言い出したことですが、それでも、「木育」という言葉をはやらせてもいいのではないかと思います。

いろいろな会合をやるときに「木育」だと手帳に書いても二字で済むのですけれども、「木についての何とかかんとか懇談会」といわれると書ききれないので大変便利な言葉です。そういうこともありまして、みんなが賛成してくれて「木育」で済ませるということがありました。

単純に申しあげると、「食育」という言葉があるのであれば「木育」という言葉があってもいい。わかりやすいのではないか。「食」という面を通じて生活なり子どもを育てていくようなことを考えるとすれば、木を使ってということも十分に考えられるのではないか。あるいは、みなさんは、そこはかたなく既に木というものはなかなか良いものだ。良いものだったということでもう一回見直してみようではないかというような方向をいろいろな面で持っていらっしゃるのではないか。そこにのって、この際「木育」を一つの用語として、いずれは辞書に載るように仕立ててもいいのではないかというようなことではじめました。どうやらまとまったということになります。

但し、私は最後に「まとまった」という言葉を申しましたけれども、今日これからパネルディスカッションをやります。そのときに、是非フロアから、「自分はこう考えるのだけれども」ということをおっしゃっていただきたい。そういう時間を是非つくりたいと思います。

先程申しましたように、本報告はこれからまとめなければいけませんから、さらにそれに今日のフロアから、ここにいらっしゃる方だけが「木育」について関心をお持ちだとは思いません。もっとたくさんの方々がいらっしゃるはずですが、少なくともそういう方々の代表としてここに参加いただいている方々からも是非、「お前たち、それは違うのではないか」というようなお叱りでもかまいません。そういうことも含めて、どうぞおっしゃっていただきたいと思います。

それを加えて、私たちの報告をもっと良いものに仕立てていこうと考えておりますので、よろしく願いいたします。

先程も申しましたように内容につきましては、二重になりますので説明いたしません。どういうメンバーで、どういう過程で「木育」というもののレポートをまとめつつあるのかということを紹介して私の報告といたします。どうもありがとうございました。

(司会者)

辻井リーダー、どうもありがとうございました。

お時間の関係もございますし、リーダーからの発言の中にもございましたように質問等につきましては後のパネルディスカッションで承りたいと思います。

それでは、いただいまより 10 分の休憩に入らせていただきます。時間が近くなりましたらお声をかけさせていただきますので、ゆっくりお休みくださいませ。

なお、会場の後ろにパネル、たくさんのおもちゃを展示しております。そちらのほうもご覧くださいませ。

………… (休 憩) ……………

(司会者)

ご来場の皆様にお知らせ申し上げます。間もなくパネルディスカッションを開催させていただきますので、お席のほうにお戻り下さい。

それでは、お時間になりました。北海道「木育」フォーラムパネルディスカッション、「木とふれあい、木に学び、木と生きる、これからの木育」を開催させていただきます。本日のコーディネーターは、先程プロジェクトチームからのご報告をいただきました(財)北海道環境財団理事長の辻井達一様をお願い申しあげております。

また、パネラーには、木エディナイターで「KEM工房」を主宰されていらっしゃいます煙山泰子様。環境学習事業の企画・運営などを手がけます、北海道自然体験学校NEOSの宮本英樹様。そして、まりづくり計画の業務など、幅広く手掛ける株式会社シー・アイ・エス計画研究所の濱田暁生様でいらっしゃいます。

なお、先程ご講演いただきました上遠様にもフロアーから参加いただいております。

それでは、これよりの司会進行はコーディネーターの辻井様をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

■パネルディスカッション

(辻井 達一 氏；コーディネーター)

今日は、先程もお話しましたが、片面をたどって行くとまたその片面にたどり着くというメビウスの輪的なお話しになればいいなと思っております。

最初にご紹介いたしますと、札幌の方はご存知だと思いますが、この前の台風のときに倒れた北大のポプラ並木で作ったしおりです。これなどは、正に生きている木の延長だといってもいいのではないかと思います。このことについては、あとで煙山さんから、それを作った感想、考え方をお話しただけのかもしれませんが、今いただいたものですからご紹介をして、このフォーラムを始めようと思っております。

さて、今日は、煙山さんを初めとして3人の方にご登壇いただいたわけですが、それぞれに木に対する、あるいは木材に対する関わりは違います。

お一人ずつ、自分と木。木というのは、先程も申し上げましたように、立っている木だけではなくて材ということも含めて、木との関わりというようなことからお話しをいただきたいと思っております。

その後で、「木育」と自分とはどうなのかということをお話していただこうと思っております。

早速ですが、煙山さんから「自分と木」についてお話しただけですか。なぜ木に興味を持ったかということでも結構です。

(煙山 泰子 氏；パネラー)

こんにちは、煙山です。

私は、札幌に生まれて、札幌で育って、今木のおもちゃですとか木の生活用品をデザインする工房をやっています。工房の名前は、私は煙山ですから、学生時代から「けむ、けむ」というニックネームで呼ばれていたのです。ですから、そのままアルファベットで「K

EM工房」というのをやっております。

KEM工房のデザインの考え方、コンセプトとして、子どもたちと、かつて子どもだった人への贈り物というふうに考えています。これは、先程のレイチェル・カーソンからの贈り物が「センス・オブ・ワンダー」ということで出ておりました。要するに、相手のことを一生懸命に思って、気持ちを込めて相手に贈り物を送るような気持ちで自分のデザインを生み出していきたい。そういう気持ちをこめて言っている言葉です。

私は、大学を出て24歳のときに、小さい頃から物を作ったり書いたりすることが好きだったものですから、自分で物を作る工房を開きました。

はじめのうちは、自分で木のおもちゃをコツコツと作っていたのですが、自分のおもちゃを「とても素敵だ。私はこんなのが欲しい」と言ってくださる方が多くなってきました。自分で作っていくには限りがありますし、値段も高くなってしまいますから、1984年から網走管内に津別という町があります。そこは愛林の町を宣伝しているくらい町のほとんどが森の中にあります。その木材工芸協働組合というところで、製品として作ってもらうようになりました。

手元に「KEM」というパンフレットがありますから、具体的にこういう物を作っているのだなということは見ただければわかると思います。

ここで製品を作ることを始めて二十数年が経ちます。北海道の木の材料で、木の良さ、木を使って遊ぶ楽しさみたいなものが感じてもらえるようなおもちゃを、手ごろな価格で生み出していきたいなと思ってやっています。

先程、私と木との出会いといいましたけれども、今回「木育」をやっていて、自分の作った物の中でとても気に入っているものがあるので、それを是非お見せしたいと思って持ってきました。

それは、「木の卵」です。これは北海道で育てている10種類の木を卵型に、こけしを作るときのように旋盤で削ったものです。それだけのもので仕掛けも何もない、何の変哲もない木の卵なのです。実は、これはとても素敵だということがわかったのです。

というのは、木というとても魅力的な素材と卵、中に命が宿っているものが出会ったときに、それを手にした人の想像力、イマジネーションの世界がとても広がるのです。だから、これは本当に、私が生み出したものではあるけれども、この卵というのはどんどんいろいろなものを生み出していく。今回の木育もそうですけれども、ある意味では、これを手に持ったときに「手の中の森」を感じてもらえるような、そんな感性が子どもや大人に広がったらいいなと思っています。

(辻井 達一 氏)

どうもありがとうございました。

「木の卵」は、私も煙山さんと知り合った最初の頃にいただいたことがあります。すごく気に入っているものです。おもしろいのは、当たり前だといえば当たり前なのですが、材料が違うわけです。つまり、木の種類が違いますから重さが違うわけです。同じサイズですが、重い物もありますし軽い物もある。感覚的にそれが伝わるわけです。こんなに違うのだろうかということが伝わるわけです。

みなさんも帰りのときにでもお試しになったらおもしろいと思います。

次に宮本さんから、今度は、同じ木といっても宮本さんの場合は森ということになると思うのですが、自由にお話しになってください。

(宮本 英樹 氏；パネラー)

僕だけパネルディスカッションのシナリオを聞いていなかったもので、今の煙山さんの話を聞いて、きちんと原稿を書いてきているのだなと思いましたけれども。

木との関わりなのですけども、僕は、今ご紹介にあったように環境教育、あるいは自然教育というものを北海道で進めていこうということで、10年ぐらい活動をしております。

木の関わりといいますか、木しか知らないといような幼少期を育ってきました。

僕は、出身が道東の置戸町です。農家のせがれです。承知のとおり1970年代後半ぐらいまでは、置戸町のようなところは、夏は農業をして、冬は造材といって大雪山近くまで馬で入って行って木を切り出すというのが農家の仕事でした。

これも恥ずかしいのですが、親が立派だと息子はこうなってしまうなと思うのですが、親父は、一応森林組合長をやっておりました。親父は事故で亡くなるのですけれども、それを相続いたしまして、僕も50ヘクタールほどの山を持たせていただいております。

本当に木と育ってまいりました。両面、一つは木材としてとらえて、自分の親が木を切って、それを薪にする。あるいは又力、これは皆さんご存じでしょうか。製材した物からおがくずが出て、家はおがくずストーブでしたので、ちょっとさぼれば家が煙にいぶされてしまうような、本当にローテクで、砂時計のようになっているわけです。僕の仕事をたけれども、袋に又力を入れて、米袋みたいな物から移し替える。それを忘れてしまうと、砂時計ですからどんどんなくなっていって、煙が出てくるというようなストーブでした。

もう一方でいうと、親父、おじさんたちが切っていた山というのは、自分が植えた山ではないわけです。天然林が残っていて国有林のほうを伐採というわけです。僕らも小さい頃は、大雪、今でいうとメト温泉あたりに連れて行かれて、キャンプをして切るわけです。飯場から奥に入ってしまうと帰って来られません。そうすると、キャンプをしながら切るわけです。寝る所は、テントは面倒なので針葉樹の下で大きな焚き火をつくって寝るわけです。そうすると、気が付いたら僕の背よりも雪が高くなっている。自分たちが沈んでいってしまうというようなところでした。

そういう所に行かないと友達もいないものですから、友達もみんな行ってしまうので、そこで、いかにおじさんたちにかまってもらうためにはどういうコミュニケーションをとればいいのか。遊びものはそれしかありませんので、いかに“のろし”をうまくあげるかとか、そういう遊びをずっとしてきました。

天然林と材を見て育ってまいりました。それが、自分では普通だと思っていました。この「木育」に入るまでは、それが分かっているものだとは思ってなくて、それが分かっているのだということにここ数年気づいて、「木育」に参加しました。

(辻井 達一 氏)

どうもありがとうございました。

まさに木と森とで育ったということです。

次は、濱田さんをお願いします。濱田さんは、ひとことで言うと、建築家と言ったほうが早いのではないかと思うのですが。最近、必ずしも木ばかりではなくて、建築といっても設計なされるのは木ばかりではなくてコンクリートの家もあるわけです。

でも、木はお好きなのではないかと思えます。木との関わりみたいなことをお話しください。

(濱田 暁生 氏；パネラー)

今、辻井先生から建築ということをおっしゃったのですが、煙山さんから、「濱田さんの経歴をみると最近いろいろなことをやられているんですね」と言われました。

私は建築家上がりなのか、建築家崩れなのかわかりませんが、今は、建築以外のことが多いです。でも基本はつながっているかなと思っています。

私は、経歴にも書いてあるのですが、九州で育っています。子どもの頃は、学校が終わったら家に一目散に帰って、鞆を玄関から放り投げて、みんなが集まるところに行きました。そこに間に合わなかったら、みんなはどこかに行ってしまうから仲間に入れないという遊びをしていました。

先程の上遠先生の話聞きながら、まさに「センス・オブ・ワンダー」の世界そのものだと思います。たとえば、山桃という話しが生まれて懐かしい言葉を聞いたのですが。すごく枝が折れやすく、実が落ちやすいのです。僕らは何をやったかということ、家から古い毛布を持ってきて、木の下に敷いて、みんなで揺すって、落ちた物を集めて食べるということをしました。

台風がきますと、九州ですからシイの実がありましてバラバラ落ちるのです。それを拾い集めるのですが、実は、非常に集めやすい所があるわけです。サツマイモの畑があって、溝ができています。そこに行きますと山のように採れるということに気がつきまして、台風がくると、シイの木があってイモがあるのはあそこの場所だから、他の人よりも早く行かなくてはということになって寝られなくなってしまうということを経験しました。

そういうことで、非常に自然の中で生活をしておりました。それがどういうわけか、父親の関係で北海道にきまして、大学を出て、建築をやりました。建築をやりますと、先生がおっしゃったように木材を使いますから、そういう面では若干の関係はあるのですが、少し遠ざかっていくようになっていったのですが、ここのところいろいろな仕事をやっていくと必ず森の話や木の話につながっていきます。

たとえば、景観の話をしていると、「国有林が荒れていますね。単層林は問題がありますね。もっと混交林にしていかなければ駄目だ。森林・林業は苦しいから山の面倒は見られません」とか、いろいろなことが出てきて、それをどうするのかということはもちろん自分たちの問題でもあります。

それから、住宅の問題をやっていると、できれば地域の材料を使いたいんだけど、輸入材に比べて高いから使いにくい。何とか使えるような仕組みはできないのかというようなことをいろいろやりました。今日は、それをお手伝いしてくれた、住宅をつくっていらっしゃる方がいらっしゃいます。

それから、まりづくりのお手伝いをしている中で、下川町の方々と仲良くなりまして、何かとただで使われる中で、門前の孤島ではないのですが、だんだんいろいろなことを覚

えていった。そんなことで、木との関係が深くなっていった。好奇心があるものですから勉強をしました。

私は門外漢なのですが、「こういうことはどうなのですか」と聞くのにはすごく聞きやすいのです。「あなたは専門家でしょう」と言われて意見を聞かれると難しいのですが、そんなことで、いろいろなところで勝手なことを言っていたら、それがおもしろいと思われたのか、「道の森林づくり審議会の委員になれ」とか、「森林臨床研究会に入れ」とか、「森林化社会研究会をつくるから座長になれ」とか。おだてれば木に登る何とかということで、これも木に関係あるのかもしれませんが、関わってきました。

経験でいいますと、その世界では当たり前のことを別の視点から「ここはどうなっているのですか」ということを聞くことに結構意味がある。そういう意味では、今日もそうなのですが、プロジェクト会議以外のメンバーが、みなさんは議論されて当たり前と知っていることが、「ちょっと不思議ですね」ということの話をするに意味があるのかなと思います。

今日は、宮本さんは筋書きがないとおっしゃったのですが、私もまったくなくて、辻井先生に身柄を預けますからということです。

(辻井 達一 氏)

ありがとうございました。

自分と木との関わりということについてお話しをいただいたわけですが。

そうすると、私も喋らなければいけないのではないかなと思うのですが。

私自身は、なぜ木育のリーダーをやらされているのかといいますと、しいて言うならば、私は大学に40年近くいたわけですが、そのうちの8割ぐらいの年数は植物園勤めだったわけですが。植物園というところは、木ばかりを扱っているわけではなく、草も全部カバーするわけですが。当然のことながら木も含めて扱わなければならない。そのあたりが「木育」チームをつくるからやってくれと頼まれた由縁だろうと勝手に思っております。おそらく、そのあたりぐらいしか接点がないということだと思います。

さて、私と木との関わりはその程度だというふうにお聞きいただくとして。

もう一巡、今度は「木育」について。先程ご紹介したように、今日は、我が「木育」チームの考え、まとめたことのお披露目なのです。こういうふうには半年の間やっていたということのお披露目です。

では、メンバーとしての「木育」との関わり、あるいは、濱田さんはメンバーではなかったわけですから、濱田さんの場合は「木育ということに」ついて結構です。木育について自分はどう思うかということの話をしていただきたいと思います。

濱田さんからお願いします。

(濱田 暁生 氏)

筋書きはないといいながらも、「木育」フォーラムですから「木育」に対して意見は聞かれるだろうなということを考える頭くらいは持っておりますので考えてきたわけですが。

実は、先程言いましたいくつかの研究会の一つに、あそこにいらっしゃいます田中さんが入っております。最終版ではないのですが、何か意見はあるかいということで意

見交換をしました。

そのときに、今日もメンバーが何人か来ておりますけれども、その人たちとの間で言ったことと、改めて壇上から何か言わなければならなくなったら少し考えてみようということ考えてきたことがあります。

一つは、自分が子どもであったということもあるのですが、みなさんの言葉でいえば、かつて子どもだったということですが、今も子どもかなと思うのですが、「木育」という言葉を何回も何回も見ているうちに、だんだんと抵抗感が出てきました。大人が子どもに上から、先程の上遠先生の言葉でいえば、教え込もうとしている感じがしたわけです。

自分が子どもで、「木育の何とか」と声をかけられたら、「てやんで」と言いそうな感じがしています。

木育よりは、木で遊ぶという「木遊」という言葉のほうが、子どもの側から考えてみたらどうかなと思いました。

子どもたちにとっては、「育」ではなくて「遊」のほうが良いのではないか。その中でいろいろなことを学んでいく。場合によっては「木遊」があって、「林遊」があって、「森遊」がある。いろいろなものがあるといいかなと思います。

それはなぜかという、上遠先生が先程言われたのですが、「木育」の中身を見ていると正しいことや立派なことの目標が書いてあって、子どもたちをそちらにもっていこうというようなことが結構書いてあるのです。自分が子どものときには、先程言ったような楽しい体験もたくさんあるのですが、実は悲しい体験とか心の痛い体験、なぜあんなことをしてしまったのかというような悔いが残っている体験。子どもは残酷ですから、命を奪ってしまったり。「お前はできるか」と言われて、本当はやりたくないのにやってしまったり。心の痛いこと、あるいは嫌なこと、つらいことから学ぶこと。自分の中ではそちらのほうが大きかったかなと思います。「これが立派なことだよ」と言われてそのとおりだと思ったことはあまりない。そんなことでいうと、そこをこぼれないようにプログラムの中でできないものか。

前回には「パイロットプロジェクト」という言葉はなくて今回ついていたのでどんなものかと思って見せていただいたら、子育ての問題や命のことが書いてありました。そのときに大人が望む子ども像みたいなところに持っていく感じではなくて、余計なこともいろいろやらせる中で失敗を経験する。そういう中でやれるようなやり方をしていくといいかなと思います。

先程、辻井先生が「食育」ということをおっしゃったのですが、「食育」には食べる楽しみや体験が入っているので、子どもたちにとっては良いことなのです。「木育」は、木は対象でしかないですから、その辺のことを入れられないかなと思いました。

(辻井 達一 氏)

ありがとうございます。

私もそういうことは良いと思うのですが、いざレポートになるといい加減にやろうとは書けない苦しさがあるので。決して弁解ではありませんが。そういうことを本報告に含めてみたいと思います。

(濱田 暁生 氏)

やっっていく中でということでもいいと思います。報告書はきれいごとでもいいと思います。それくらいの強かさでもいいと思います。

(辻井 達一 氏)

ありがとうございます。

では、宮本さん、どうでしょうか。「木育」との関わり、「木育」で考えたこととお話しいただけますか。

(宮本 英樹 氏)

僕は、「メビウスの輪」でいうと緑側が仕事としては多いわけです。森林環境教育といわれるような分野の仕事が多かった。

それから、センス・オブ・ワンダーほどではないのですが、僕も実家である置戸に帰るたびに、甥をずっと育ててきていたわけです。甥と一緒に散歩をしたりしていた。その二つの中で、自分の中にびっくりすることがありました。

一つは、甥と河原で釣りをしようと。子どもとの釣りなので、柳を切って、それに針をつけて釣りをしようとしたら、甥が「おじちゃん環境と言っているのに、木を切っているのか」ということを言われたわけです。10歳ぐらいの子なのですが、論破してやりましたが、かなりショックでした。

「それは誰が言っているの」と聞いたら、「学校の先生が言っている。とにかく木を切ってはいけない」ということでした。これは一つショックなことでした。ずっと一緒に遊んできたのにそういうことを言っているということ。

このことを僕がポロッとしゃべってしまったのでここにも載ってしまったのですが、“あいまいな正義”ということ。どの木は切ってはいけない、どの木は切ってもいい。あるいは、自分とどう繋がっているのかということ個別に考えていかなければならないのに、社会はあいまいに動いていってしまっている。これは、木を使えばそういうところに切り込んでいけるのではないかとことを思いました。

これもお恥ずかしい話なのですが、そういうわけで、うちはインタープリタと呼ばれるのですけれども、自然を案内するようなスタッフがたくさんいるわけです。自然のことをよく知っています。センターの運営をプロデュースすることもあるわけですが、センターの職員に下川町からもらったコースターを見せたのです。それは、答えを言ってしまうとカラマツとトドマツのコースターなのです。「お前たち、このどっちを高く買う」と意地悪く聞いたわけです。

そうすると、全員がこの材は何でできているかということを知りませんでした。外に行けば彼らはきちんと、「これはトドマツで、こういう特徴を持っている。カラマツは北海道の植林によって」というようなことを言うのですが、コースターは誰もわからなかった。このときに、今の社会の繋がり、素材と物との繋がりがわかりづらくなっている。教える側もそうなっている。それは、イコールで社会全体のいろいろな繋がり、子どもが何か繋がるよう学んでいく場というものがなくなっているのではないかとことを思いました。

僕の中ではすごく繋がっているものだと信じていたものだったので衝撃を受けて、そこが繋がるような場、あるいは、今回このプロジェクトに参加させていただいて、煙山さんのように材を使って何かを作ろうとする。いわゆる、「メビウスの輪」でいうと茶色側の人とも仲間になれた。こういうネットワークというか、僕ら自身も木というものを媒介して繋がっていくことで新しい発想とか、新しい育というものをつくっていけないかと思えますので、木をとおしてどんどん繋がっていきたいなと思っております。

(辻井 達一 氏)

ありがとうございました。

煙山さん、今度は「木育」チームに参加してでもいいし、そこで考えたことでもいいです。言い足りないことでもかまいません。

(煙山 泰子 氏)

私が木育プロジェクトに参加してとても良かったなと思うことの一つは、木がますます好きになったということです。私自身が木でおもちゃを作ったり、いろいろな物を作るようになったきっかけというのは、木が好きだなと思ったことなのです。

それは、小さい頃の話をするれば、私は昭和 30 年生まれで、木のおもちゃはなくて、どちらかというとキャラクター、小さい頃だとフラフープ、ダッコちゃん人形も流行りました。キャラクターだと鉄人 28 号とか、そういうようなおもちゃが全盛のときだったわけです。

私が大学に入って、いろいろな素材を使っていた頃に、北欧の木のおもちゃが紹介されはじめました。実は、そういうものを見て、私は、本当はこういうおもちゃで遊びたかったのか、本当はこういう物が欲しかったのにと思いました。でも、そういう紹介されている物が欲しかったけれども高くて買えなかったものですから、それでは自分の手で作ってみようということで、初めてカンナの手ほどきを受けて板を削ったのが、大学に入ってからですから二十歳ぐらいのことです。その最初に手渡された板というのは、私はドブ板ではないかと思ったくらいとても古くて汚い。一生懸命に作ろうと思っていたわりには、こんな汚い板で作るのかと思って、とてもがっかりしたのです。

その板にカンナをかけていったときに、中から木目が出てきた。その木目というのは、本当に汚かったのと対照的にきれいな肌なのです。香りも木の香りがしてくる。カンナのかけ方が上手になってくると、カンナの削りかすがシュルシュルシュルというふうにかかってきた。木は好きだな、自分と相性がいいなと思った。それが木を好きになったきっかけです。そのときの思いが今でも続いています。

先程の台風で倒れたポプラの木が、ただの災害廃棄物のようになくなって捨てられていくのがとてもかわいそうだなと思ったのです。だから何とか、せっかく立っていた木が材になったときにも、寄付してくれた方々の気持ちに伝えるような記念品をつくりたいと思って、葉っぱのかたちをデザインしました。

宮本さんが、この「木育」プロジェクトの中では“つながり”というのが大事なキーワードだよねということで話し合ったのです。これは、私の「たまころファミリー」という木のおもちゃなのですが、手や足がゴムで体と繋がっているのです。木と森も繋がります

けれども、私たちというのは自然の一部なのです。だから木や森と自分たちは繋がっているのだ。木をとおして親子、人與人、社会というものがこの人形が繋がるように繋がっているということに改めて気づいたことがとても良かったことです。

(辻井 達一 氏)

ありがとうございました。

もう少し話をしてもらおうと、煙山さんの袋からまた何か出るのではないかと思います。今、木と自分との関わり、「木育」と自分との関わりということでお話をさせていただきました。

先程、濱田さんが、「子どもに教え込む」というふうに聞こえるのではないかとということ。それから、「木遊」という言葉がいいのではないかと話がありました。

今日は、北海道中からいろいろな方に来ていただいているのですが、函館から木村マサ子さんがいらっしゃっています。

先程立ち話して、保育園の話をしたのですが、その話をここでしてくださいませんか。今の濱田さんの話と繋がるのではないかとと思うのですが。

(木村さん；会場)

2日ぐらい前にフォーラムがあることを知って、切符が1枚あったので函館から飛び乗って来ました。

参加しての感想なのですが、一つは案内をいただいて、事前に基調講演を聴いていたのですが、自分がしていることを田舎にいと確かめられないのです。こういう集まりがあると、自分がやっていたことに励まされるというか、自信を持って函館に帰れるということで、ありがとうございます。

聞いていて思ったことは、一つは、私は函館から来ると、函館は周り海なのです。道南の中でも特に海に近い。木の話や森の話、自然観察の話をする、山の話と川の話しかないわけです。山の水が流れると海に入って、絶対に繋がっているわけです。海の人山を見ながら仕事をしているわけです。木がどの辺に生えて、何の花が咲いたら何の魚が捕れる。そこに鳥が止まるとどんな魚が捕れるとか。山を見て仕事をしているわけです。

昔から魚付保安林といって、今は日高など、いろいろなところではじまりました。海の人山と関わりがないのだけれども、造林の森とは違って国土を守るというか、地域を守るために植えているわけです。そういう意味では、こういう集まりではなく会議のときには是非「海辺の人」も入れてほしいということがあります。

私は、函館山で自然観察指導員をしていたのです。初めて行ったときは、鳥や花という単品を見るのが観察だと思っているのですが、やはりトータルで自然を見ないと駄目だということを強く思っております。

もう一つは、図鑑や写真や言葉ではなく体感してもらわなければならないということが一番だと思ってやってきているわけです。要するに、身体で体感するということです。

実際にわかったのは、7年前から全盲生が修学旅行に来てくれているのですが、案内すると、五感で使えないのは目だけなのです。あとは身体で全部、臭いや音を感じることができる。これは、健常者は当然使える手法なのですが。

5年間続いた0歳児から3歳児までの保育園に行かない子育てサロン。核家族で子どもをいじめたり、被害に遭う子ども達のたまりができたのです。そこの先生から野外にということをやったのが、まさに、オムツが取れるか取れないかのこのような子どもなのですが、草刈りが入る前の安全な道をコースに使って歩くと、1メートルぐらいの草ですから森のような感じがするわけです。そこを続けていくと、親は自分の子どもの成長がわかって、すごく喜んでくれる。子どもは50人ぐらいなのに、家族がその3倍から5倍来るわけです。両親とおじいちゃん、おばあちゃんが来るわけです。

最後に、宮本さんではないけれども、記念の道具、おもちゃを作っていくわけです。その辺の木を拾っておもちゃを作るわけです。そうすると、「世界に一つしかないおもちゃだ」ということで、大事に箱に入れて子どもが持って帰る。そういう木に触れる心が大事なのだと思います。

昨日、先生から「5歳の保育園児35人で、1年間を通して木を植えたり、花を植えたり、育てることをやりたい」という相談を受けたのです。「鉢に花を植えるということはどこでもやっているの、ここを全部使おう」と。その保育園は、裏が函館八幡宮の境内、その上は函館山ですから採ったり持ち帰ることはできない。でも、神社の境内は自由に使える。近くに公園があるし、ちょっと歩くと立待岬、海岸線があるのです。1年間で森を見たりして、はじめは鉢に何かを植えるといったのですが、境内に行くと小さな芽が出るから、子どもたちに拾わせて、それを育てよう。そうしたら、どうやれば大きくなって、どの木がお母さんなのかわかるよという話しをしたら先生ものってくれました。

枯れたら泣くのではないかとか、悲しい思いもするのではないかとということで、いろいろなことが起きるから、そういう体験をする1年間をやりようという話しを昨日してきたばかりです。

(辻井 達一 氏)

すごく臨場感あふれる話しだったと思います。大変ありがとうございました。

ここで、自分は「木育」をこう考えるのだけれどもということも含めて、どなたでも結構です、お手をあげてくださればと思います。

それから、上遠さんへの質問があればしていただいても構いません。3人の方にお話しをしていただいたのですけれども、3人への質問でも構いません。いかがでしょうか。自分は「木育」という言葉を聞いてこう感じた。私の「木育」とはこういうことなのだということがあれば、どなたかお話しくださいませ。

(近藤さん；会場)

今日は、貴重なお話しを伺いましてありがとうございます。私は近藤と申します。

今日の案内を1週間近く前に聞きまして、行ってみようと思ったのは、一つは上遠さんのお話しがあるということ。「木育」ということだけですと馴染みがなかったのですけれども、そのようなことも含めてフォーラムがあるということで期待して伺っております。

先程の話しにもありますけれども、子どもたちが自然に触れていって大人になっていく大切さ。木を使って、木に親しみをもち、ある意味では経済活動ということも含めて広範囲な動きになっていくと思います。

上遠さんの最初の話で、このことの大切さ。そういったことで子どもたちが成長していくということを強調されたと思います。

私が心配なのは、文部科学省のことにも少し触れられていたと思うのですが、そういった動きが主流になっているという今の流れにつきましても、今日の主催の方々はその方面にも働きかけていくことが必要ではないかということを感じました。

この点で、上遠さんから補足的なお話があればありがたいと思います。

私は大学で環境教育を学生に教えています。特に、先程のセンス・オブ・ワンダーの映画、2時間の映画を30分にして、環境教育のビデオをレイチェル・カーソン協会から送っていただきまして学生に見せております。

そうしますと、学生は非常に感動して、残念がって、「レイチェルのようなお母さんに私を育ててほしかった」という非常に嘆きの言葉が入ってくるわけです。今日来られたお母さんはレイチェル・カーソンの心で育てていただきたいと思います。

私は、大学生に自然を見ようとか植物園に行こうとか。特に北大の場合は必ず植物園に行くというコースを作っているのですが、それが非常に役立っていると思います。雨の日に私が「植物園に行こう」と言うと、「カゼをひくような寒いときに行かせるとは何事だ。その責任はお前が取るのか」というふうに教師を非難する学生もおります。ですから、幼少のときなら馴染むようにしていただきたいということを痛感しております。

(辻井 達一 氏)

上遠さん、今のお話しに対して考えをお聞かせいただければと思います。

(上遠 恵子 氏)

確かに、子どもたちが自然体験をしておく、私の孫の経験なのですけれども、小さいときには本当に山猿のようにして育ちました。

その子が3年、4年になりますと、例によってピコピコゲームに夢中になりまして、なかなか山には行かないのです。ああいう人工的なものは、こうすればこうなるということがわかってくると飽きてきて、5年～6年の頃に「基地づくり」ということで山に戻ってきました。

そういう子どもたちを見ていますと、小さいときに本当に自然体験のない子どもは、基地づくりで仲間になるのですけれども、すごくへたくそなのです。どうしたらいいのかわからなくてモタモタしてボーッとしています。

それが小さいときに体験のある子どもは、たちまちに何かつくってしまうのです。少しくらい手が切れても平気。これが違いかなと思って見ていました。

小さいときに体験のなかった子どもも、最後には何かをつくるのです。そういう可能性を持っている。そこに2つのタイプがあるなと思いましたがけれども、最後には、みんな仲良く基地をつくって遊んでいる。そこが子どもの良いところです。

大自然でなくても中自然でも小自然でもいいと思います。そういうところで小さいときに遊んだ経験というものを持たせていくということ。木を育てるのと同じように長いと思いますけれども、そういうことができるという希望を持ちたいと思っています。

私の経験で、私が子どものときから本当に好きだった100年くらい経つような桜の木

が3本もある家が近くにあったのです。その方が亡くなったら売ってしまったのです。そうしたら、その木があっという間に切られて、切られるというよりもブルドーザーで押し倒された。お酒でもかけて切ったのならまだ許せるけれども、なぎ倒すのです。悲鳴を上げて木が倒れました。そして、1本もなくなったところにポコポコ家が建ちました。

私は、行政に文句を言いに行ったら、「書類上には、何も無いから許可した」ということでした。

木が100年経つまでの時間は大事な時間だというふうに言いましたけれども、その建築課は許可を出した。

では、環境課のほうは、「では、屋上庭園をつくってください」とか、そんな馬鹿な話があるかと思います。ただ木を切ってはいけないという感情的なものだけではなくて、木を残しながら家を建てるということは、私は建築家なり造園家の腕の見せ所ではないかと思います。

これからそういう子どもがどんどん育ててほしいと思っています。

(辻井 達一 氏)

もうお一人方どうぞ。

(斉藤さん；会場)

札幌大谷第二幼稚園の園長をしております斉藤と申します。

先程先生がおっしゃいましたけれども、子どものときから自然の中で、木を含めた自然の中で育ってくればよかったなということを行った学生がいるということでした。

ここにいるのはうちの先生方です。うちの幼稚園の場合は、就職したら一番に読んでもらう本は、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」なのです。うちの幼稚園の柱はセンス・オブ・ワンダーで貫いております。

先程、濱田先生がおっしゃった「木育」という言葉を聞いたときに、私は「良かったな」と思いました。「食育」という言葉がありまして「食べ物で育つ」ということは、お母さん方に非常にうけたのです。お母さんは「教育」という言葉が大好きなのです。私たちがいくら自然をお母さん方にとってもなかなか理解されなかったものですから、「木育」という言葉に“やった”と思ったのです。

私は、ここに来て考えました。うちは「木遊遊」でいこうと考えました。上遠先生の話のように、うちは共にということをお大切にしておりますので、教えるという考え方を持っておりません。子どもをサポートするという考え方、今度は「木遊遊」でいこうかなと。

実際にやっていることは、毎日のように木と触れ合っています。3歳児が雨の日にも行きます。吹雪の日にも行きます。

去年、3歳児を連れて吹雪の日旭山公園に行きました。バスで送ったのですが、そのバスがぬかって動けなくなってしまったのです。そうしたら先生方が困って「どうしよう」と言ったら、子どもたちは「大丈夫だよ先生、這って行くから。這って道まで出る」と言いました。先生方は、その言葉に励まされて行ったのです。子どもたちは真冬でも雨の中でも元気です。先程先生がおっしゃいましたように、雨の日は本当に木の香りがプンプンします。天気のいい日は、風通しのいい日は、トイレの臭いも飛んでしまいますけれども、

雨の日はトイレの臭いがこもります。それと同じように雨の日の森は、特にカツラの木の周りは、子どもたちの言葉で言えば、「わたあめの臭い」がするという甘い香りがします。そういうことを子どもたちが五感で感じてきます。そういう幼稚園が札幌に一つあります。

これを貫き通しておりますと、文科省も、文科省側から押さえつけてくることもありませんけれども、こちらの実績も少しずつでも認めてくれることがあります。

公立幼稚園は文科省どおりにやっていますけれども、私立幼稚園のほうが進んでいるかなというふうに首をかしげてくれる人もいますので、私たちはそれを訴え続けていこうというふうに思っております。

私たちは本当に参考にさせていただいているというか、私たちのシンボルはレイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」です。それを訳してくださった上遠先生に敬意を表しております。

本当にどうもありがとうございます。

(辻井 達一 氏)

どうもありがとうございました。

既に、「木育」の方向でやっていらっしゃるところがあるということは、私たちにとっては大きな励みというよりも、安心です。「木育」チームでも、小学校では遅いのではないかということ。今先生がおっしゃったような五感、体感的にということになると小さいときのほうがいいわけです。幼稚園・保育園のあたりからということが大事なのではないかと思えます。

今まさにおっしゃったように、「公立の」というとなかなか動かすのが大変だということで時間がかかりそうな感じがします。私立幼稚園・保育所でこそはじめていただくといいなという話しをしております。

ですから、大変心強く思っております。どうぞよろしくお願いします。

(女性；会場)

今日は本当に素晴らしいフォーラムを開いていただきましてありがとうございます。

一つ、反対のことを言うような気がするのですが。私も濱田先生がおっしゃるように、子どもに何かを教えるというふうになると違うのではないかという感じがとてもしています。今の流れを聞くと、「こういうことをしよう、こういうことを与えよう」というような、私にはきれい事に聞こえてしまうのです。

かたちだけを整えるのではなくて、実は私たち大人個人がそれをする事なのではないかと思ったのです。私も「こういうことはいいことだから、こういうことが小さいときには必要だ」と本当に思います。今小さな子どもを2人育てていますので、実感として思います。

思ったならば、することは、自分自身がすること、大人自身が一緒にすることなのかなということを感じたのです。きれい事はいらぬのではないかという気がしました。

自分がやること、わからないことは聞く。自分で責任を持って、大人自身が痛い目に遭うことなのかなと思いました。

(濱田 暁生 氏)

私が言ったことは、「木育」に反対ということではなくて、実は、先程きれい事というふうに嫌な言葉を使ってしまっていて反省しているのですけれども、子どもたちの立場に立ったときにどう受け止められるかということをしちゃんとやってくださいという部分で、大人たちが何か仕組みをつくろうとするときは、「木遊」というと遊びと言われるところもありますので、「育」という中できちんと教育なり何なりと関連付けたこととしてやりましょうという論でいいと思うのです。

でも、やるときには子どもたちの立場に立ってというところを大事にしましょうねというところを忘れないでいただければというつもりです。

今おっしゃっていただいたのですが、こういうプロジェクトチームがやると、つい頑張ってしまうのです。立派なことをたくさん入れようとするので、地道なことを、今までやられてきたことなのだけれども、「こういうところを改めるともっと良くなる」ということにも目を向けていただいて、そういう積み重ねをやっていただけるようにしていただければと思っています。

先程、下川町の話をしたのですが、今下川町は人口 4,200 くらいです。町有林は4千数百ヘクタール、1人1ヘクタール以上持っています。今彼らは、これを財産だと言って、価値観が逆転するぞと言っていています。それをどうやってやったかといったら、国有林をずっと買い続けたのです。町の全予算の1.数%ということを経初の年に突破して、これくらいですからやりましょうということで、それ以降は、翌年は前年並み、前年並み、前年並みという行政的な手法でやる。それを四十数年やって、4千ヘクタールまで拡げた。こういう行政のやりやすいやり方に目標なり何なりを見据えた中でやっていくということも大事なことなので、木育でいったほうがやりやすい部分もあるということをお否定するものではないということをお言います。

(辻井 達一 氏)

まだ伺いたいのですけれども、時間が迫ってきています。

宮本さんと煙山さんに一言ずつ、これからの「木育」について、感想でも結構です。今日は上遠さんのお話からはじまって、みなさんに自分としてはこんなふうなことを期待したいということでも結構です。

(宮本 英樹 氏)

本当にたくさんの方が集まったなと思います。みなさんの話を聞いていて、「木育」というプロジェクトがあって、僕らも話し合ってきて本当に良かったなと思っています。

それは、既にやられていることもたくさんあるし、自分自身が生きてきたことへの再評価というか、その合い言葉をつくったようなものだと思うのです。「木育」という言葉がなければ僕らはここに出会えなかったかもしれない。それをうまくつかって新しいものをつくり出していけなかったかもしれない。

どういふものになっていくかはわからないのですけれども、そういう出会いの場が出来上がっていくだろう。それは、ネットワークされることで新しい力になっていくだろうというふうな予感がします。

本当に「育」の時代だと思えます。

僕は、「育」の側にいると思うのですが、木材、木というものの素材の良さを学んだなと思います。木の中に「育」というソフトを加えることで木の価値はもっと上がります。逆に教育のレベルも上がっていく可能性があるのではないかと思います。

今の思いつきなのですけれども、木の皮は捨てられています。僕は、療法と教育の間で「療育」が一番大事だと思っているのです。子どもたちはバッファなゾーンにいる。病気でもないし教育でもないところにいる層が大半を占めている。そこに一番ターゲットを当てていくべき子どもたちだと思うのです。

そういうことにしてみれば、感覚、木の外側を触っている感覚がいいのではないかと。頭にも知能にもいいのではないかと。でも、それは、材として見れば捨てられてしまっている物である。「材」と「育」というソフトが加わることで両面に良い方向性に向かっていく。

それが、こういう出会いの場だなというふうに思えます。みなさん頑張りましょう。

(辻井 達一 氏)

昔、森の中に行って、我々の祖先が木の枝にぶら下がっていたときの感触かもしれませんね。

では、煙山さん、どうぞ。

(煙山 泰子 氏)

今、木育の「育」の字が、ともすれば子どもとか教育というふうにとられがちです。実は、「木育」の中で大事にしたいのは、子どもをはじめとする全ての人、大人・子どもということではなくて、いろいろな人、みんなが木とふれ合い、木と学び、木と生きる。そういう姿勢を持つことによって心を育む。自分たちの生き方、感性、自分自身を育む。そのことが地球なら地球という大きな命の繋がり全体を育むことに繋がる。

そういうことに気づいたことなのです。

ですから、「木育」というのは、誰がどういうふうにやらなければならないということではなくて、誰でも、いつでも、どこからでも自分なりの木育をはじめていただきたいと思えます。

(辻井 達一 氏)

ありがとうございました。

時間になってしまったので、ここで閉じなければならぬのですが。私としてはもう少しみなさんからも伺いたかったところなのですが時間がきてしまいました。

今日お集まりの方々、木育という言葉、木材・木というものに関心を持っていらっしゃる方が来てくださったのだと思うのです。

本当は、「木育」なんて全然関心がない、木なんて好きではないという人に来てもらいたい。そういう人に対して我々がいかに「木育」、木というものの考え方、そういうことをもう一度考えてくださいということを言いたいのですけれども、往々にしてあるのは、関心を持っている方が集まる。これは仕方のないことなのですが、できれば、今申し上げたも

っと広い範囲で、そんなことに興味を持っていない人に対する呼びかけをしたいと思いません。

最初に申し上げたように、今日差し上げました木育のまとめは、要約版です。お役所風にいえば、3月31日までにまとめて報告書を道庁に提出するということとなります。何らかのかたちで、たとえば、今日お集まりの方々にお送りするという事は難しい。というのは、結構厚い物になると思います。

たとえば、ホームページを開けば見ていただけたらとか。お問い合わせがあったら差し上げることができるというふうなことを考えたいと思います。

そのことについては、それこそ来ていただいた方の連絡先がわかれば今申し上げたようなことで、これから先の連絡もできるようにしたいと考えます。

こんなところで今日のフォーラムを閉じさせていただくこととします。

どうもありがとうございました。

■閉会

北海道水産林務部木材振興課 田中 あずみ

どうもありがとうございました。

パネラーのみなさんからは、木にまつわる思いのこもったお話し、会場のみなさんからもそれぞれの経験を踏まえて熱いお話しをちょうだいできたと思います。

最後に、コーディネータとパネラーの方にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。

以上をもちまして北海道「木育」フォーラム～木とふれあい、木に学び、木と生きる、これからの木育～を閉会させていただきます。

本日のフォーラムが、皆様にとって森林や木材を通じて心や力を育むことについて考えるきっかけになれば幸いです。

最後に、皆様にお願いがございます。本日お配りした資料の中にアンケートをご用意させていただきました。そちらのほうにご記入の上、机の上に置いていただけて結構です。是非、本日のご感想などをお寄せいただけたら幸いです。

それでは、これもちましてフォーラムを閉会させていただきます。

本日はお忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。お帰りは、どうぞお気をつけてくださいませ。

なお、会場の後ろで展示をさせていただきますので、お時間のある方は是非ご覧くださいませ。

ありがとうございました。

4. 参加者アンケートの結果

番号	性別	年齢 (10歳毎)	Q1 木育についての感想	Q2 参加してみたい・取り組んでみたい「木育」		Q2 フォーラムへの感想・意見
				どのような場で	どんなことを	
1	女	20		夏休みや冬休みに	親子でネイチャーガイドのような方に導いていただきながら森や海を楽しむイベント	小さな頃から自然を特別視せず“隣にある大切なもの”として受け入れる体質づくり。関心のある親子だけでなく、広く、どの子供にも平等のそのきっかけを与えてあげたい。 託児所があり、大変ありがたかったです。 参加者が発言できる時間が短すぎる。 「理想的な子供達をつくる」のにふさわしくないこと（安価なプラスチックおもちゃを与えているなど）を實際暮らしの中で行っている現代の母親を追いつめない“大きな見守る目”を忘れてください！
				学校で	単なる演出という遠足ではなく、あらかじめ子供達にテーマを考えさせ、自然にふれ、発見させる遠足を設ける。	
2	女	30	木育の理念には共感できるが具体的なものが見えづらい。例えば、学校教育の場などでどのように関わっていきけるのかが分からないと思いました。（プロジェクトの具体的な事例が書いてあると良いですね） 「木育療法士」について、もっと詳しく知りたい。どこに照会したら良いのでしょうか？（養成研修等の案内）	地域で	木を育てる。住んでいる地域に小さくていいので森を作りたい 「自分たちの森づくり」児童公園の替わりに森や原っぱがある といいなあ・・・	上遠さんのお話がとても興味深かったです。自然を愛する心、自分自身を育む心、そして自分以外の人を慈しむ心、すべて同じなんだと思いました。 函館の方や、幼稚園の園長先生のお話も体験的でとてもよかったです。
				学校や生涯教育など教育の場内で	修学旅行を日本の自然、世界の自然を知るといようなテーマでやるのはどうでしょうか？	
3	女	30	豊かさって何かを改めて自分に問いたくなりました。人間の力ではどうにもならない無力感、その中で過ごす時わき出る力・・・美しさ、安らぎはもちろん、身体からわき上がる生きる力を自然は与えてくれる・・・。気は水もきれいにしてくれる。やはり、木だと思いました。			何かを教えるのではなく、共に感じ合う。 自然の一部である自分！人と人、社会！！つながっている。 自然を体感しあっていきたいです。待つ、受信モード！！の自分でいきます！！ 本日はありがとうございました。
4	女	20	木というものは落ち着けるものとして、大切なものであると思います。		実際に木のおもちゃを作ってみると（自分で）愛着がわいたり、大切にできる心が育つのではないのでしょうか。	木というものは、生きていく中で必要なものであり、大切なものと改めて思いました。身近にあるのだから、もっと木のおもちゃなど手にとって遊ぶ機会が多くなるといいなあと思いました。
5	女	20	人も環境の一つであること、その自分自身がこれからどう子どもたちと共に学び、育ち合っていくのか。再確認させられました。			今以上に、子どもたちと共に自然の中に出掛け、心の栄養を増やしていきたいと思いました。
7	女	50	幼い頃は遊び場と言えば山か川、海でした。それぞれの立場からのお話をまとめると、私達大人がどう、木と関わっていくか。また、子どもにも木と触れ合う楽しさ、不思議さ、自然の科学等、やはり、つながり（生命）を伝えていきたいと感じました。	身近な公園から知る機会が必要だと思います。	幼稚園であれば木の実のお母さんは誰か名、と遊びながら楽しむ、落ち葉の色と同じ洋服の子を探したり。	様々な方向から木に触れる自然への関心を少しでも高めていきたいと思っています。
					発展した遊びは、コースターや落ち葉のアート等	

番号	性別	年齢 (10歳毎)	Q1 木育についての感想	Q2 参加してみたい・取り組んでみたい「木育」		Q2 フォーラムへの感想・意見
				どのような場で	どんなことを	
8	女	20	上遠先生の「センス・オブ・ワンダー」のお話を始め、自ら気持ちをこめ、心を育むこと、自分が大切にしたいことをみなさんがすすめていたことで自信ができました。	森林など自然の場で	自ら体験すること。森育スクールや合宿など	
9	女	20	自然の中で育つことが、子どもに色々な体験を与えて、強い心を育てることにつながる、大人も共に育つという点。	森、川、海で	自然に触れる。	
10	女	20	子どもが育つには自然がとても大切な存在だと思っています。	幼稚園	自分たちで木からおもちゃを作り出す喜びを味わう機会を与えたい	
11	女	20	子どもと一緒に感じるという点。	幼稚園で	木のおもちゃ、遊具、楽しめる物を作りたい。 子供も作って楽しめるもの。過程を楽しめるもの。	
12	男	40	本当の豊かさ、幸せ、人生に自然との触れ合いが必要であることが確認できました。			
14	男	60	道民、多くの人達は樹木に対して無関心の人ばかりです。このようなフォーラムがもっともっとあるといいと思った。	私は自然体験塾を主宰していますが幼稚園から年齢の高い人までを対象としています。観察会などを実施しています。		実践的な面がもうすこしほしい。たとえばならば間伐材をどのように利用していったら良いか考えてほしい。
15	男	60	上遠さんのお話がとてもよかったです。今後も時々北海道に来てお話ししていただきたいと思います。子どもたちだけでなく、すべての人、誰でもどこからでもはじめてもらいたい。			辻井先生の最初のお話「まとめ」がわかりやすかったです。今後は上遠氏のお話の内容が一つの柱となるような展開を希望します。木遊々（ゆうゆう）でいこう。大谷幼稚園での「sense of wonder」を基点にしている点に感動しました。大人自身が進んですることが大切ではないかと思いません。
16	男	40	木育を木遊の気持ちで始める、続けるをしていけばいいんだなと思いました。	道の知事自ら「木育道でしょう」で	「木の卵のプール」で遊んでみてほしい	会場満員にビックリ。比較的若い人が多い点も。
17	女	30	森林と木材とつながっている、というところに共感できました。	どこでも	木にはいろんな種類があるということを知る、山での木とつながって考える（環境のなかでの存在）	「木育」という言葉について、上から与えるのではなく、大人も自ら行動すること、という意見がよかった。子どもの頃、あまり木で意識してなかった者としてはこれから学んでいきたいと思っています。
18	男	30	現在社会問題となっている色々な解決要素を多々含んでいけると感じました。木育自体は、自分たちや、親、子それ以前に自然に行われていたと思います。それを時代に合わせて伝えていく手段となっていくと感じます。	幼稚園・保育園で	子供達の発想にまかせて、自然の物を使った作品	レイチェル・カーソンについて大変興味を持ちましたので、まずは、二つの本を読んでみたいと思います。

番号	性別	年齢 (10歳毎)	Q1 木育についての感想	Q2 参加してみたい・取り組んでみたい「木育」		Q2 フォーラムへの感想・意見
				どのような場で	どんなことを	
19	男	40		親子を対象に、小、中学校で	本を体験する、触れてみる	来年も開催して欲しい。
20	女	20			木材について勉強	これからも、何かあれば参加させていただきたいです。ありがとうございました。
21	女	30	上遠さんのおっしゃった発信モードから受信モードに切り替えるということが心に残った言葉の一つです。今、2人の子供がいますが自然のものの言葉に耳を傾けることは、平和の道にもつながるのかなと思いつつ聞いていました。またフォーラムが上位下達の関係が無くとてもいい雰囲気だったのが嬉しかったです。	今、カミネッコンによる森づくりの集まりを予定しています		もっと最後の質疑応答の時間が長いと、たくさんの方のお声をきけたのでは、と思います。でもなかなか難しいですね。宮本さんのおっしゃる様に、市民と行政などネットワークをつなげていくことが興味のない方へも木育の入り口になっていけるのかなと思いました。
				北の森の沢の魔女の森でゴールデンウィークから森遊びの会を企画しています		
22	女	30	いろいろな立場の方が考えて「木育」が推進されていることが分かりました。「育」という字についての意見もありましたが、子供を「育てる」という意味だけでなく大人や自分が「育つ」意味も込められていると思ひ、賛同します。	家庭で	身近なフィールドをもち、家族で訪れるそんなフィールド（森林）についての情報を発信することも必要では？	とても興味深く、有意義でした。3月末で北海道を離れますが、今後の発展が気になります。HPなどで道外からも情報が得られるようにしていただきたいですし、「木育」を道内だけではなく全国へ広げていただきたいと思います。又、その時に一端を担えればいいなと思います。
23	女	30	木や森のもつ魅力と可能性を再確認できた。ゲームなどのバーチャルの中で遊ぶ子供が多い現代において、本物のもつぬくもりやいのちの尊さを伝えることが、木という素材ならできるのは、改めて感じました。	職場で	木の持つ魅力を伝えられるような企画をつくる	とても素晴らしいフォーラムでした。自らについても振り返り、今後の参考にできたと感じています。
				家庭で	身近なところに木材を使って、身近な人に良さを知ってもらう	
24	男	40				食育はその根っこになる農育を充実させたいと考える人々には、食農教育に向かいました。木育の根っこは、遊なのか、環境なのか、それとも何かあるのか、考えてみたいと思います。
25	男	40		職場で	気の良さを育生啓発	「木育」は誰でもどこでも、自分の創意工夫でやっていくべきであることを痛感しました。
27	男	30	浜田さんの意見で、あまり押しつけになってほしくない、というものに共感。		森に遊びに行く 木でおもちゃを作る	
28	女	60	上遠恵子先生にお逢いでき、講演を聴くことができとても嬉しかったです。まだまだ自分も何かできるかなと共感できました。ありがとうございました。	家庭で 町内、地域で、公園、川など、森（原始林）	野菜くずで肥料を ごみ拾い、落ち葉拾い、花壇づくり。森林浴など	参加できてとてもよかった。「木育」という言葉が地球語となる日が来るような気がしてきました。合い言葉として大きく広がっていくことを念じています。
29	男	60	上遠先生のお話が聞いて感動しました。レイチャール・カーソンの生涯や沈黙の春、センス・オブ・ワンダーについては、自分のポリシーとして、子供達に話すことが多い、センス・オブ・ワンダーの一節もよく利用させて頂いています。	野外観察会 博物館、植物園等	野外観察 フィールドワーク、講演等	

番号	性別	年齢 (10歳毎)	Q1 木育についての感想	Q2 参加してみたい・取り組んでみたい「木育」		Q2 フォーラムへの感想・意見
				どのような場で	どんなことを	
30	女	30	できれば、大人への木育（遊）も提案していただきたい。 子供に言う前に、まず大人からでないとい子供は話を聞かないと思います。	図書館で	絵本が好きなお子に、実際に森や木を体験してドキドキしてほしい。	期待しています。ありがとうございました。
31	女	50	実践しているテーマそのもので、自分の活動に自信がもてた。	子育てサロン～親子野外体験（5年間）0～3歳児 今年度4月から保育園児（5才）の環境教育（体験）で木材をテーマに触れる活動（育てる）を行う		案内頂いてありがとう。Q1におなじ。
32	男	70↑	木の活用が主体となり、木（森）を育てる話が少なかった。	木の係りは、非寛して多様です。 幅の拡がりを期待してます		人と木との関わりは十分に理解できた。一方で人間の心の部分についても考える必要があるのではないか。 仏教では神は木に宿る。鎮守の森の神社 etc.. 死生観にも、死ねば山の上に昇るとか、日本人の宗教、自然観などに畏敬の念の強い木の存在は大きいと思います。
33	女	20	全体に共感できますが、一部共感できません。木が自然の中で担っている役割・必要性（水を貯えるダム、地盤の安定など）について学ぶ場も含めて「木育」だと思う。そこが不足している。 一般出席者の女性の方が発言していましたが、宣言・理想を掲げているだけではなく「じゃあ、具体的に何をやるのか」ということが見えなかった。誰がいつ何をやるのか、是非実現・実行してほしい。そういう活動を支援してほしい。	地域、子供・親子むけ	森の春夏秋冬の宝探し発見会	基調講演の上遠恵子さんのお話を楽しみに来ました。以前センス・オブ・ワンダーのビデオを見ましたが、改めて自然の尊さを感じました。
34	男	30	環境教育、森林環境教育に代わる言葉として、よい言葉だと思う。	様々な場で	木を植える体験はかかせない	木育は木を通じて育てるのではなく、木と共に育つ、もしくは木と共に育むということをもっと強調してもよい
35	女	60	これからの環境づくりに大変大切な部分が共感。出来る部分と、そうでない課題があるのでは？	実践（植樹、手入れ、間伐、草刈りの行事）を市町村で取り組めるように年間行事として	どんぐりの種を拾う所から幼稚園とと共に実施する事、私たちが取り組んでいることがたくさんあります。”山川草木を育てる集”が長年実行しております。	
36	女	60	木に親しむ事。	家庭で	オリジナルのおもちゃを作る	型に捕らわれない自由なものだと思います。
37	男	20	心意気。			部屋が暑かった。イスが固かった。
38	男	60	木も人間も自然の一部。生命の尊さ、不思議さを幼い時から関心を持てる様に育つ事が大切と思う。	小学校	樹木の種子の発芽とその苗の植樹体験	
39	男	30	本来の木（森）の良さ、大切さ、必要性は勉強したり、教えられたりするものではなく、感じるもの、当然のものであるはず。しかし今はそれをわざわざ説明しなくてはならないのが異常なことである。木から代わっていったもの（石油・化学製品）が本当に良いのか考えなくてはならない、広い視野が必要。	大人に対して	経済至上主義の見直し。価値感の見直しを説明する事が必要	これらを考える“場”を続けてほしい。 本日参加していない意識のない人達へのPRをどうするかが大切。 最後に良い所に気が付きました。（大人の方が問題）

番号	性別	年齢 (10歳毎)	Q1 木育についての感想	Q2 参加してみたい・取り組んでみたい「木育」		Q2 フォーラムへの感想・意見
				どのような場で	どんなことを	
40	女	40		身近な里山で	山に実際に行って感じてもらう (木についても調べる・切ってみたりして)	良い内容でした。
41	女	40	ゆるやかに継続していくこと。	環境サポートやレター等道庁の庭 学校へ	木製品作り 木材を提供してもらう	環境教育や農学とのかかわりについてもきいてみたいです。
42	女	20	現在必要とされていることを実現させよう！というエネルギーの大きさに驚きを感じました。只、道外出身者の開拓の歴史を含めた主旨を伝えていくのはなかなか難しいと思います。	日高山脈 河川	山村留学 いかだ下り	充実した時間を本当にありがとうございました。出産後、このような場に足を運べなくなりイラダチを感じていた最中、託児付きでのこのフォーラムは社会にとって、家庭にとって大きな宝となりそうです。関係者の皆様に御礼申し上げます。
43	男	50	北海道にとっても日本にとっても再生可能な木材資源の大切さ、重要性をこれからの政策や政治の目標の一つとしてほしいと思いました。	森林内の散歩 山菜採り	キノコのことを勉強したい 木製品を作ってみたい	
44	女	50	「木育」という言葉。	図書館、子供の集まる場	木のおもちゃと遊ぶ	上遠さんのお話、良かったです。木育フォーラムにこれがあって良かったです。今までの行政フォーラムとちょっと違う感じがしました。
45	女	50	自然を育むことは人間を育むことと同じなのだと思います。	図書館で、	木のおもちゃで遊んでみる。「木を植えた人」を読んであげる	発言者も多く、活発な意見交流が出来たと思います。
46	男	10	木を切ったから環境破壊になるとは自分も思っていない、それを次へつなげられれば森林の育成につながると思います。	教育の場（学校 etc）	苗から木にするのはかんたんだが、こわすのもかんたんであるということ 煙山さんのように木を色々な角度から見れて、形に出来るような、遊び場作り	とてもおもしろかったです。何事も「つながっている」ということがわかった。木に助けられればなしであるので、人も助けねばつり合いがとれないなあと感じました。
47	男	30	人の長い歴史は自然との関わりを無視しては語れない（生き物である以上）。しかし、昨今の環境破壊、環境問題を考える時、私達自身が自然をよく理解し、関わり方を考え直さねばならず、その一つのアプローチとして共感しています。		ネイチャー・ゲームの手法を取り入れています。身近な自然を知り、理解する（親と子で）	もっともっと、小さな子供の頃から成人になって以後も身近な自然を長く、繰り返し継続的に観察したり、何か行事であったりイベントであったり参加して知り、学び、共感する機会が増えるといいと思います。
48	男	40	子供の頃から木・森林に親しむ場を作ることはとても良いことだと思います。	小学校 森林公園内	森の中でのキャンプ教育 親子の木のふれあいの場	スタッフのみなさま、ありがとうございました。
49	女	30	自分や自分の子供にとって、森づくりの技術は必要ではないかもしれないが、「食育」同様、森や木（自然）をとおして「生きていく力」をつけていくことは大切だと思う。	{家庭}・地域で 保育園、幼稚園	親子で遊べる森ツアー（何処で、どんな風に遊べるのか。親子で学べる場を設けてほしい） 木のおもちゃ（今日の会場にあった木の砂場など）の設置。小さめな物でも木のおもちゃは比較的高価で家庭ではなかなかそろえられないので、保育園にあると嬉しい。	

番号	性別	年齢 (10歳毎)	Q1 木育についての感想	Q2 参加してみたい・取り組んでみたい「木育」		Q2 フォーラムへの感想・意見
				どのような場で	どんなことを	
50	女	60	“木の大好きな人”の集まりという共感。舞台と会場とのつながりを感じる。「木遊」もいいね。海辺の人とのつながり。子育て中のお母さんや大人が何か行うことが大事で、子供に教えるものではない。	生まれ育った地域で、中高年の交流の場で 若者の専門疎交、「鳥雀の森」裏参道。「日本の永久専門学校」東田郎先生の話こと北国の森作り	育苗ポット作りをしています（カミネッコン）保育、幼稚園児や子供たち（小学生がよい）と 野山にカミネッコンを置きにゆく、有珠山の噴火後地や石狩川附近（雪の下にも置いて雪中植林）北大校内にエゾミソハギを（降雪・雨を活用）植えた	大勢の参加者にまず驚いた。自然や森、木の大切さを教え、教育するものではなく、木を育てる大切さが中心となるフォーラムかと思ってきました。関心を持たない人達へのアピールを宜しく願います。
51	女	60	木育＝森を育て、木を育てる原点そのものですね。動輪の森のオーナーに参加してる者として大変興味があります。	介護施設、グループホーム、養護施設等	子供限らず、木のおもちゃを通して遊びながら学べると感じました。	
52	女	30	木育という言葉にひかれたよりも上遠さんがいらっしゃるといふことで参加しましたが、木を育てる、木に育てられるという両方の意味がある木育は、とても良いと思いました。 自然は大事にしなければいけないけれど、保護だけでは片寄ってしまうので、私達も自然の一部として共生していくことが必要だと思うので、木育がそれをかなえてくれると思いました。	地域・町内	木のおもちゃを作ってみる 大人だけでも参加できるもの	子育て、子供と自然との関わりだけが大きくとりあげられたが、私達大人も木にふれ、育てられることが大切だし必要だと思うので、大人だけでも参加できる「木育」もやってほしい。
53	男	60	浜田さんの言われるような「育」より、「遊」かピタリのがする。 知識だけを与えると、もう知っているという気分になってそれ以上興味も示さなくなるし感動も伴わない。	定年村のような処で	お年寄りと子供の組み合わせの中で	
54	男	60	現在私自身木の玩具の作成に日夜努力していることから、この類の集まりに積極的に参加しています。			なかなか、日頃理解していないことが耳に入り、参考になりました。
55	男	50	①木を育てること ②木を使うこと ③木との環境でしょうか？一つ森林の中に人を入れることが少ない。人と木は同じ、多様。木の植樹をそろそろ考えた方がよいのではないかと？	色々な木を植えてもらいたい。 木にふれる。木の中に入る。木の樹幹をいただく、木の実を頂く。 木の花々を楽しむ	子供に作ってもらいたい。大人は発想が古い。	アフリカのマータイさん。どうして日本の女性の中がマータイさんのような人がでてこなかったのか。日本の男性も女性も精神がオカシクなってきたのかあー精神の後進性は木本や草本をないがしろにした結果ではないでしょうか？ 中途半端な日本人から、あたりまえのことを当たり前にいえる状態を早く作るべきであると思います。
56	男	50				改めて気付きの時間にちしました。 上遠さんの講演、もっと聞きたかったです。とってもおだやかで心に----しみてきました。ありがとうございました。
57	女	20	木が育つのに色々な条件があって、年数やしかかって大きくなる＝人が育つと言うことと同じだなぁと思える。人と人が関わるのも人と木が関わるのも同じこと。大地（地球・母に）根をさして生きる。	家族、学校、幼稚園でこの親を巻き込んで	山で遊ぶ、木を植える。（自然）外で寝て、起きて作って、食べて。海で川で。	色々な活動をしている大人たちがいておもしろいなと。子供だった頃、どんな遊びをしていてどんな夢があったかなあー大きくなった子供がたくさんいるなあ。